

幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業
成果報告書
(令和4年度～令和6年度)

機 関 名 : 北海道教育委員会

1. 事業実施の目的

<事業実施の目的>

本道においては、公私の別や施設類型を問わず、全ての子どもに質の高い幼児期及び幼保小接続期の教育を提供することができるよう、令和元年6月に幼児教育推進センターを設置し、教育庁及び知事部局（幼児教育担当課：総務部、保健福祉部）が一体となって幼児期及び幼小接続期の教育の質の向上に向けた施策を展開してきた。

幼小連携・接続については、令和元年度から2年間、各地域の実情に即した幼児教育施設と小学校との接続の円滑化に取り組み、その成果を道内の幼児教育施設及び小学校等に普及することをねらいとして、「幼児教育と小学校教育の円滑化モデル事業（以下、「円滑化モデル事業」という。）」を実施した。

円滑化モデル事業では、道内5市町を指定地域として、拠点校に幼小連携・接続推進リーダーを配置し、域内の幼児教育施設及び連携校とともに、①保育者・幼児との交流、②公開授業の実施、③校内研修の充実、④引継ぎの充実、⑤スタートカリキュラムの充実等による授業改善に取り組み、その成果を道内から寄せられた実践例等とともに「幼児教育と小学校教育の連携・接続ハンドブック」に取りまとめ、道内へ普及啓発を図った。

また、令和2年度には、幼小連携・接続を推進するために、幼児教育施設・小学校・市町村が、それぞれの取組の現状を把握し、充実に向けて参考となる取組をまとめた「幼小連携・接続のチェックシート」を作成し、道内へ普及啓発を図った。

一方で、令和3年度実施「幼児教育実態調査」において、ステップ2以下の市町村の割合は約8割となっており、広大な地域に179市町村が点在する本道においては、幼児教育と小学校教育の連携・接続に関する取組の意義や重要性に対する認識、幼小接続に向けた取組等に濃淡がある状況があったことから、指定地域におけるモデル的な取組を通して、接続に関する課題に対応するプログラムを策定し全道へ普及することをねらいとする。

<園・小学校の施設数等>

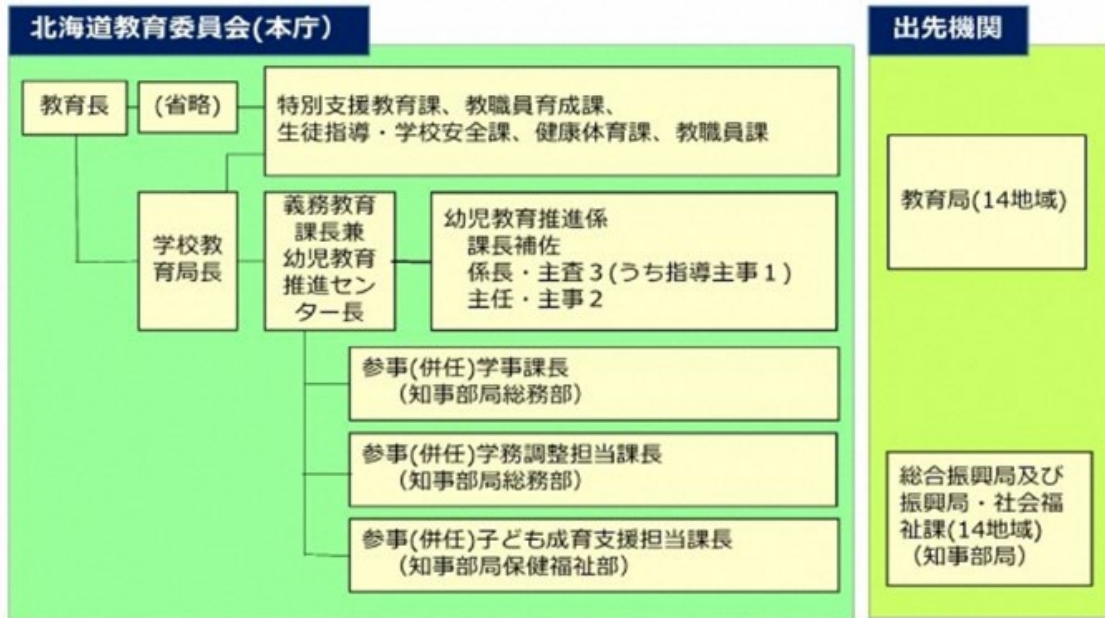
	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	2	34	286	220	559	25	305	3	926	5
園児・ 児童数	115	774	25,615	50,757		2,416	36,202	1,215	214,403	470

2. 事業実施に当たっての体制づくり

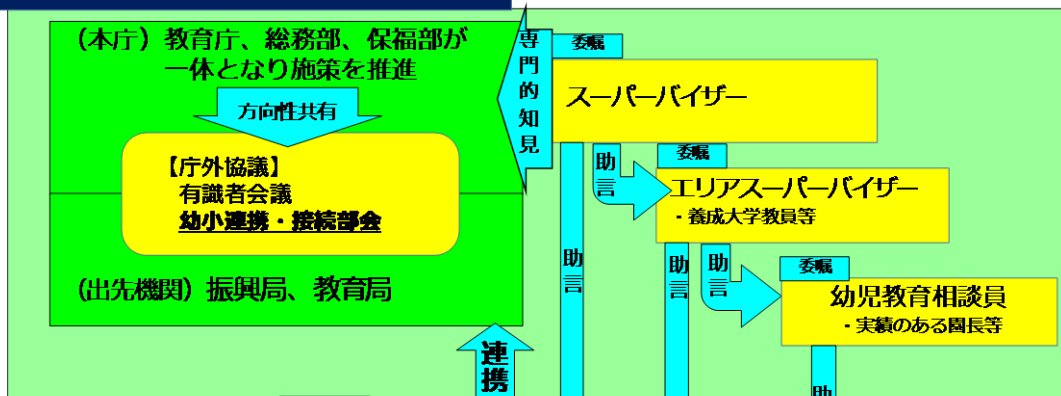
2-1. 組織図・体制図

【道】

<組織図・体制図>



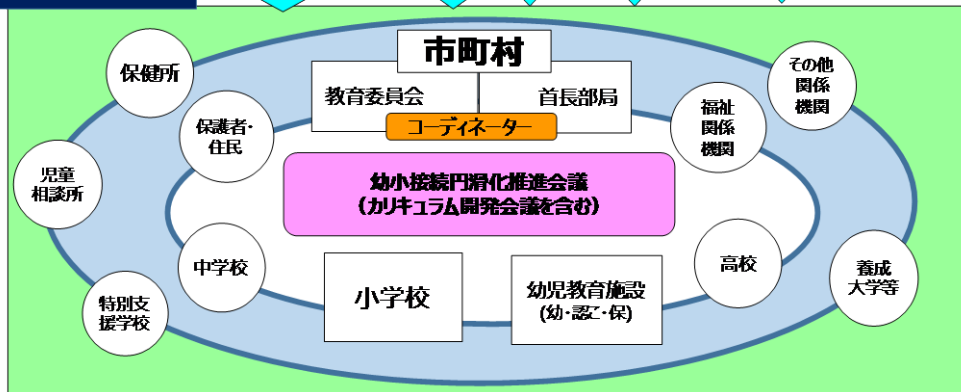
幼児教育推進センター



地域での実践・研究を再委託

連携・協働

指定地域



(北海道幼児教育推進協議会)

学識経験者、市町村長・市町村教育委員会教育長、幼児教育機関・小学校・特別支援学校関係者、PTA関係者で構成。幼児期及び幼保小接続期の教育の質の向上を図るため、北海道幼児教育振興基本方針に基づく各種施策の推進状況等について意見交換をする会議体。

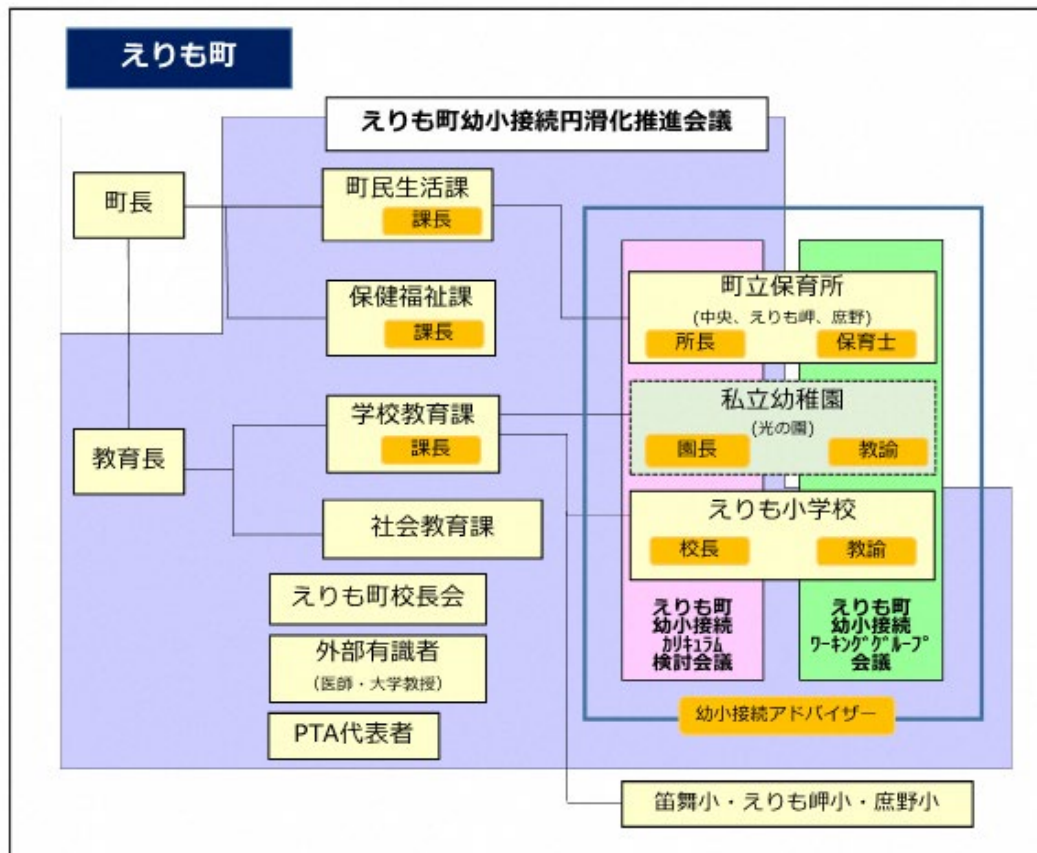
(北海道幼児教育推進協議会 幼小連携・接続推進部会)

学識経験者、市町村・市町村教育委員会関係者、幼児教育機関・小学校・特別支援学校関係者で構成。北海道幼児教育振興基本方針に掲げる施策のうち、幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた方策等を専門的に整理・検討する会議体。

<体制づくりの進め方>

- ・幼児教育推進センターは、円滑化モデル事業の指定地域や学びの連続性に配慮した教育を重視した施策を展開している道内の4市町を選定し、当該市町の教育委員会及び保健福祉部局に事業説明。道南に位置するえりも町を指定地域として調査研究を実施することを決定。
- ・本道は広域であり、地域によって接続に係る課題が異なることから、様々な課題に応じた解決方法をより多く収集することを目的として、本事業2年目に道北に位置する佐呂間町を指定地域として追加。
- ・幼児教育推進センターは、関係課（総務部学事課、保健福祉部子ども成育支援課）及び関係教育局と連携・協力し本事業を推進。指定地域を管轄する教育局は、当該町が実施するカリキュラム開発会議等において、調査研究が円滑に実施できるよう指導助言。
- ・スーパーバイザー、エリアスーパーバイザー及び幼児教育相談員は、必要に応じて本事業の取組について幼児教育推進センターに助言。
- ・幼児教育推進センターは、幼児教育推進協議会及び幼小連携・接続推進部会を開催し、本事業の進捗状況等を報告。協議会の委員は、本事業の取組の推進に向けて協議。

【えりも町】
 <組織図・体制図>



（えりも町幼小接続円滑化推進会議）

教育長、学校教育課長、町民生活課長、保健福祉課長、幼児教育施設長、小学校長、えりも町校長会、外部有識者、PTA代表者で構成。架け橋期のカリキュラム開発の方針を決定し、実施に当たっての支援等を検討する会議体。

（えりも町幼小接続カリキュラム検討会議）

幼児教育施設長、小学校長で構成。架け橋期のカリキュラム開発の方針を基に、町の現状と課題を整理し、架け橋期のカリキュラムの方向性を決定する会議体。

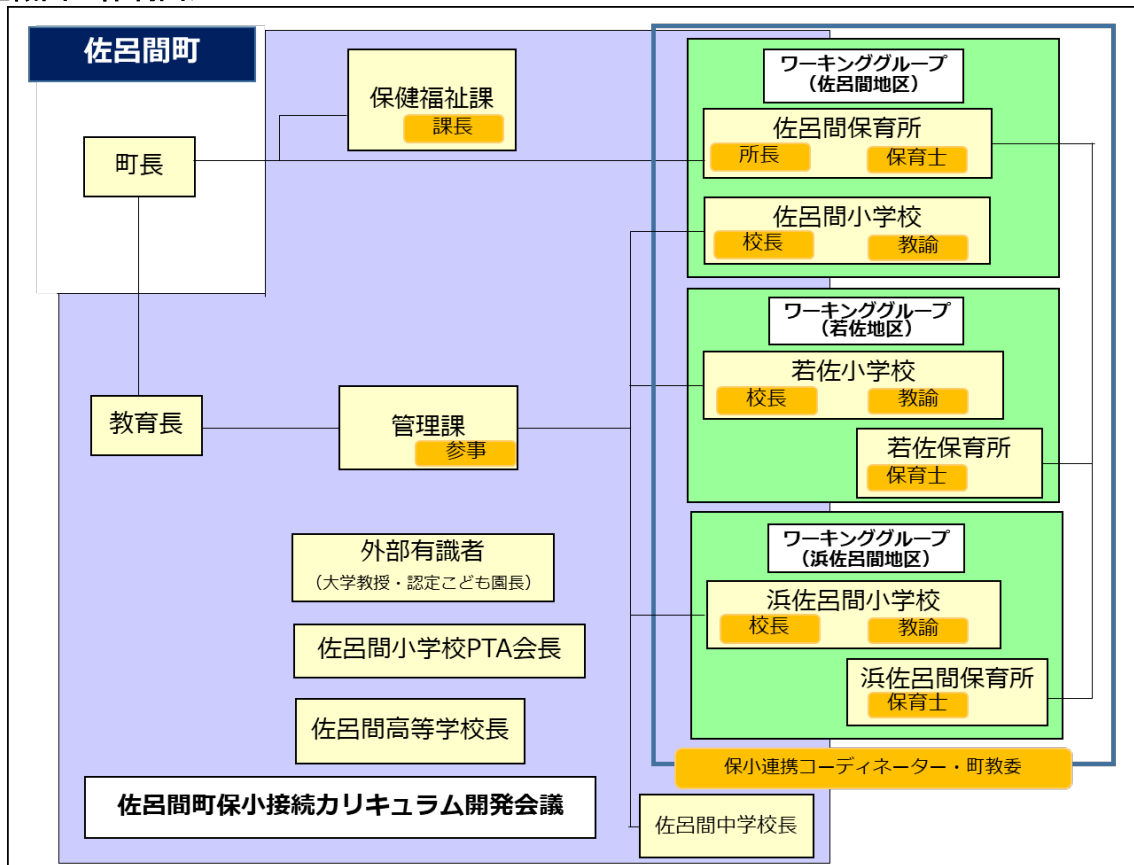
（えりも町幼小接続ワーキンググループ会議）

幼児教育施設の保育者、小学校の教員で構成。子どもの姿や各幼児教育施設・小学校の保育及び教育活動を基に、架け橋期のカリキュラムの内容を協議する会議体。

<体制づくりの進め方>

- ・教育委員会は、町立保育所を管理している町民生活課、保健師が在籍している保健福祉課に事業説明し、連携協力を依頼。
- ・教育委員会が中心となり、関係者へ事業説明を行い、実施体制を構築。
- ・教育委員会は、架け橋期のコーディネーターを公募し任用。

【佐呂間町】
<組織図・体制図>



(佐呂間町保小接続カリキュラム開発会議)

教育長、教育委員会管理課参事、保健福祉課長、幼児教育施設長、小・中・高等学校長、小学校PTA代表者、外部有識者、保小連携コーディネーターで構成。架け橋期のカリキュラム開発の方針を決定し、保小接続カリキュラム及び保小接続円滑化プログラムの策定、分析、検証等を行う会議体。

(佐呂間町幼保小の架け橋プログラム事業ワーキンググループ)

幼児教育施設の保育者、小学校の教員、保小連携コーディネーターで構成。架け橋期のカリキュラムの内容の協議や教材開発等を行う会議体。

<体制づくりの進め方>

- ・教育委員会が中心となり、関係者へ事業説明を行い、実施体制を構築。
- ・教育委員会は、保小連携コーディネーターを採用。

2-2. 協力園・協力校

【えりも町】

<協力園・協力校の概要>

設置者	施設類型等	園名・校名	幼児・児童数等	接続園・校のグループ
私立	幼稚園	光の園幼稚園	7名（5歳児：4名）	A
町立	保育所	中央保育所	53名（5歳児：5名）	A
町立	保育所	えりも岬保育所	8名（5歳児：6名）	B
町立	保育所	庶野保育所	7名（5歳児：2名）	C
町立	小学校	えりも小学校	121名（小1：21名）	A
町立	小学校	笛舞小学校	18名（小1：2名）	A
町立	小学校	えりも岬小学校	32名（小1：5名）	B
町立	小学校	庶野小学校	28名（小1：2名）	C

<協力園・協力校の指定プロセス>

- ・本事業の趣旨を鑑み、町内の全幼児教育施設及び小学校を指定。
- ・公立・私立や施設類型、学校種を問わず、教育委員会が幼児教育施設長及び小学校長に事業説明を行い、協力を依頼。

<自治体と協力園・協力校の連携・協働の取組>

- ・幼小接続アドバイザーが各施設の担当者と連携を図り、各種会議や研修会の日程調整及び周知。
- ・幼小接続アドバイザーが各幼児教育施設及び小学校を訪問し、施設長、学校長及び担任と子どもの実態や架け橋期のカリキュラムの実施状況等について意見交換等を行い、本事業の進捗を確認。

<協力園と協力校同士の連携・協働の取組>

- ・幼小接続アドバイザーが中心となり、幼小合同研修会や幼小接続ワーキンググループ会議、幼保合同研修会を実施することにより、幼児教育施設の保育者と小学校の教員が意見交換や協議をする機会を設定し、縦と横のつながり、横と横とのつながりを構築。
- ・幼小接続アドバイザーが各施設のよい取組を他の施設に情報提供するなど、縦と横をつなぐ結節点となって連携・協働体制を構築。
- ・幼児教育施設と小学校では活動時間が異なるため、研修の時間設定が困難であったが、各施設の先生同士が話しやすい関係を築くことができるよう、ICTも効果的に活用しながら、幼児教育施設間、幼児教育施設と小学校が話し合う機会を多く設定。

【佐呂間町】**＜協力園・協力校の概要＞**

設置者	施設類型等	園名・校名	幼児・児童数等	接続園・校のグループ
公立	保育所	佐呂間保育所	97名（5歳児：26名）	A
公立	保育所	若佐保育所	5名（5歳児：3名）	B
公立	保育所	浜佐呂間保育所	6名（5歳児：4名）	C
公立	小学校	佐呂間小学校	108名（小1：14名）	A
公立	小学校	若佐小学校	28名（小1：1名）	B
公立	小学校	浜佐呂間小学校	12名（小1：0名）	C

＜協力園・協力校の指定プロセス＞

- ・本事業の趣旨を鑑み、町内の全幼児教育施設及び小学校を指定。
- ・教育委員会が保育所長及び小学校長に事業説明を行い、協力を依頼。

＜自治体と協力園・協力校の連携・協働の取組＞

- ・小学校については、毎月定例開催している校長教頭会議において、教育長が本事業の経過を説明。
- ・校長教頭会議以外幼児教育施設については、保小連携コーディネーターが個別に事業内容や今後のスケジュール等を説明。

＜協力園と協力校同士の連携・協働の取組＞

- ・保小連携コーディネーターが中心となり、保小合同研修やワーキンググループを実施することにより、保育所の保育者と小学校の教員が意見交換や協議をする機会を設定し、縦と横のつながりを構築。
- ・保育所間の連携については、全園が公立保育所でありこれまでに築いてきた連携体制を生かし事業を実施。

2-3. 協力団体等

【道】

<協力団体等の概要>

団体等名	団体等の活動概要
北海道国公立幼稚園・こども園協議会	実態調査、研修、機関誌の発行、各種調査や委託研究等
北海道私立幼稚園協会	研修事業、広報事業、退職金制度の運営等
北海道保育協議会	調査・研究、育成強化活動、情報提供等
日本保育協会北海道支部	研修事業、調査研究、情報提供、広報活動等
全国認定こども園協会北海道地区会	情報交換・意見交換、情報提供、研修、調査研究、認定こども園の普及・充実及び運営改善等
全国認定こども園連絡協議会	情報提供・研修会、各種政策の提言、ICT化支援、人材確保支援
北海道幼稚園教諭養成校協会	教育内容の調査、研究、情報提供等
北海道町村教育委員会連合会	情報交換、調査研究、教育制度に関する検討等
北海道都市教育委員会連絡協議会	情報交換、調査研究、教育制度に関する検討等
北海道小学校長会	校長会地区活性化事業、地区研究活動、教育経営研究、法制研究等

<各協力団体等との連携>

- ・協力団体から選出した委員で構成する幼児教育推進協議会及び幼小連携・接続推進部会において、本事業に係る協議を行うことにより、各団体の意見を反映させた。

【えりも町】

<協力団体等の概要>

団体等名	団体等の活動概要
えりも町校長会	えりも町内の学校経営全般に係る連絡・調整

<各協力団体等との連携>

- ・校長会において、各小学校の幼小接続に関する取組を情報交換したり、中心となって取組を進めているえりも小学校の実践を共有したりすることにより取組の推進を図ったが、小学校間で取組内容や進捗に差があったことから、全ての学校で実践の充実が図られるよう引き続き情報共有を行っていく必要がある。

【佐呂間町】

<協力団体等の概要>

団体等名	団体等の活動概要
佐呂間町校長会	佐呂間町内の学校経営全般に係る連絡・調整

<各協力団体等との連携>

- ・町内には小学校3校、中学校1校があり、全小学校が協力校、中学校長は保小接続カリキュラム開発会議の構成員になっていることから、保小連携コーディネーターから各校長に事業説明を行い、協力を依頼した。
- ・町内の小・中学校は、日常的に連携が図られており、協力体制が構築されていることから、本事業を円滑に推進することができた。

2-4. 架け橋期のコーディネーター等

【えりも町】

＜架け橋期のコーディネーター等の概要＞

新規／継続	事業に関わった年度	役職名	経歴
新規	令和4年度	えりも町教育委員会 学校教育課指導主事	元公立中学校長
新規	令和5～6年度	幼小接続アドバイザー	元保育士、保育所での勤務 経験あり

＜架け橋期のコーディネーター等の役割等＞

(任命のプロセス)

- ・教育委員会が、会計年度任用職員として本職種を募集し採用。

(コーディネーターに期待した役割)

- ①幼児教育施設及び小学校の実態把握、分析
- ②カリキュラムの開発、ワーキンググループ会議における支援
- ③幼児教育施設と小学校、幼児教育施設間の連絡調整
- ④幼保小合同研修会の企画・実施 等

(実際に担った業務や成果 (○) 及び課題 (●) 等)

- 幼児教育施設及び小学校を訪問し、複数回にわたって本事業の内容や方針等を説明したことにより、架け橋期の教育についての理解が深まり、架け橋期のカリキュラムの作成に向けた取組を推進することができた。
- 架け橋期のカリキュラムの実施・改善に当たって、保育・授業参観後、先生と共に保育・授業を振り返り、接続の観点から助言を行うなどの支援を行ったことにより、先生方の指導観が変わり、保育・授業の改善が図られた。
- 幼小合同研修会を企画・実施したことにより、幼児教育施設の保育者と小学校の教育が、幼児教育と小学校教育について互いに理解を深めることができた。
- 幼保合同研修会を企画・実施したことにより、幼児教育施設間の交流のきっかけが生まれ、幼児教育施設が互いに保育参観を行い、他の幼児教育施設の保育のよさを取り入れるなどの取組が行われたことにより、子どもが主体的に環境に関わる教育の実現が図られ、幼児教育の質の向上につながった。事業最終年度には、幼児教育施設が主体的に他の幼児教育施設と連携を図り、合同保育を行うなど、幼児教育施設の主体性も見られるようになった。
- 近隣町の幼児教育施設への視察研修を企画・実施したことにより、幼児期及び架け橋期の教育の充実に向けた取組への参考とすることができた。
- 幼小合同研修会等は勤務時間内で実施しており、参加できる人数や場所が限定的になってしまうことから、幼小接続アドバイザーが研修時間の設定等を工夫することにより、できるだけ多くの職員が参加できるようにした。

【佐呂間町】

<架け橋期のコーディネーター等の概要>

新規／継続	事業に関わった年度	役職名	経歴
新規	令和5～6年度	保小連携コーディネーター	元公立小学校長

<架け橋期のコーディネーター等の役割等>

(任命のプロセス)

- ・教育委員会が、令和4年度末に退職した小学校長を任命。

(コーディネーターに期待した役割)

- ①保小連携の課題分析 ②保小接続カリキュラムの開発 ③指導計画例の作成
- ④保小接続円滑化プログラム(佐呂間版)の作成 等

(実際に担った業務等)

- ・各保育所及び小学校を訪問し、幼小接続の現状・課題、取組の進捗状況を把握するとともに、関係者及び保護者を対象にアンケート調査を計3回実施し、本事業の成果と課題、先生や保護者の意識の変容などを把握・分析した。
- ・架け橋期のカリキュラムの開発に向けて、方針案やカリキュラムの様式等を提案するとともに、ワーキンググループの企画・立案・運営を行った。また、ワーキンググループの意見を取りまとめ、架け橋期のカリキュラム案を作成した。架け橋期のカリキュラムを実践に当たっては、担当の先生が取組のイメージをもつことができるよう実践サポート資料を作成し、担当の先生と協議しながら保育・授業づくりを行った。実践後は、取組のよかった点等を架け橋通信にまとめ、担当以外の先生方にも周知を図った。
- ・架け橋期のカリキュラム概要版に基づき各施設で実践を行う際に、具体的な取組をイメージすることができるよう、指導の時期、指導内容、指導のポイント、教育課程上の位置付けと関連を明記した指導計画(架け橋期のカリキュラム解説版)を作成した。

3. 架け橋期のカリキュラム開発会議

3-1. 会議委員等

【えりも町】
＜会議委員一覧＞

会議の代表者氏名		川上 松美	他 12 名（実人数）
会議委員氏名	所属機関 所属・職名	具体的な役割分担	従事期間
川 上 松 美	えりも町教育委員 会教育長	全体統括 （課長 1 名、係長 1 名、 会計年度任用職員 1 名）	令和 4 年 9 月～ 7 年 3 月
吉 田 貴 弘	えりも小学校長	小学校におけるプログラム 策定等	令和 6 年 4 月～ 7 年 3 月
三 浦 良 美	えりも小学校 教諭	小学校におけるプログラム 策定等	〃
橋 本 信 夫	えりも町役場 保健福祉課・課長	幼児・児童への子育て支援 （係長 1 名）	令和 4 年 9 月～ 7 年 3 月
山 本 裕 文	えりも町役場 町民生活課・課長	保育所の運営全般に係る支 援（係長 1 名）	〃
北 村 里 美	中央保育所長	保育所におけるプログラム 策定等	〃
越 後 奈津美	えりも岬保育所長	保育所におけるプログラム 策定等	〃
佐 原 し の ぶ	庶野保育所長	保育所におけるプログラム 策定等	〃
高 田 大 志	浦河ひがし町診療 所副院長・精神 保健福祉士	幼児・児童の発達課題に関 する支援	〃
小 林 茂	光の園幼稚園長	幼稚園におけるプログラム 策定等 （副園長 1 名、教諭 2 名）	〃
吾 田 富士子	藤女子大学 保育学科教授	本事業のアドバイザー	〃
大 場 智 仁	P T A	保護者、地域の立場からの 意見	令和 5 年 4 月～ 7 年 3 月

＜会議委員の決定プロセス＞

本事業実施に当たって新設。様々な立場からの意見や地域の実態の把握、町として目指す方向性の共有を図るため、幼児教育施設と小学校に加えて、医療や子育て支援の担当課、保護者、保育分野に精通した大学教授を委員として、教育委員会において選定。

【佐呂間町】
 <会議委員一覧>

会議の代表者氏名		二神 孝久	他 13 名 (実人数)
会議委員氏名	所属機関 所属・職名	具体的な役割分担	従事期間
二 神 孝 久	佐呂間町教育委員会教育長	全体統括	令和6年8月～7年3月
弘 内 裕 子	佐呂間町教育委員会管理課参事	全体総括補佐	令和5年7月～7年3月
天 笠 茂	千葉大学名誉教授	0～18歳を見通した連携全般に関する指導・助言	〃
佐 藤 亮	北見市光西認定こども園園長	元小学校長及び近隣の認定こども園長の立場からの提言等	〃
菅 原 正 弘	保小連携コーディネーター	保小連携の課題分析、カリキュラムの開発、指導計画例の作成、保小接続円滑化プログラム（佐呂間版）の作成等	〃
池 田 潤	佐呂間小学校長	小学校長の立場からの提言等	令和6年8月～7年3月
小 林 冬 季	若佐小学校長	小学校長の立場からの提言等	令和5年7月～7年3月
中 垣 孝	浜佐呂間小学校長	小学校長の立場からの提言等	令和6年8月～7年3月
津 村 宏 嗣	佐呂間町役場保健福祉課長	幼児・児童への子育て支援政策を担う立場からの提言等	〃
大 谷 宏 明	佐呂間保育所長	町立保育所を運営する立場からの提言等	〃
杉 山 友 洋	P T A	保護者・地域の立場からの提言等	令和5年7月～7年3月
安 田 吉 雄	佐呂間中学校長	中学校長の立場からの提言等	〃
山 崎 逸 子	佐呂間高等学校長	高等学校長の立場からの提言等	〃

<会議委員の決定プロセス>

本事業実施に当たって新設。様々な立場からの意見や地域の実態の把握、町として目指す方向性の共有を図るため、幼児教育施設と小学校に加えて、子育て支援の担当課、保護者、保育分野に精通した認定こども園長、学習指導要領等に精通している大学教授を委員として、教育委員会において選定。

3-2. 開催実績

<開催実績>

【えりも町】

令和4年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
10月17日 15時30分～ 16時40分	<ul style="list-style-type: none"> ・説明1「北海道版幼児教育スタートプログラム事業について」 ・説明2「えりも町におけるプログラム開発について」 ・説明3「えりも町のカリキュラム開発への期待」 ・架け橋プログラムに係る協議 	架け橋プログラムの概要や今後のスケジュールを共有し、関係者の連携の方針を決定した。 各小学校のスタートカリキュラムについて共有し、課題を整理した。
2月22日 16時00分～ 17時00分	<ul style="list-style-type: none"> ・幼小接続円滑化推進会議に向けた事前打合せ 	架け橋期のカリキュラム素案及び令和5年度版えりも小学校スタートカリキュラム案について共有した。
2月27日 16時00分～ 17時00分	<ul style="list-style-type: none"> ・説明「架け橋期のカリキュラム作成について」 ・協議「架け橋期のカリキュラム開発について」 ・講評「今後の架け橋期のカリキュラムの実施について」 	架け橋期のカリキュラム構想案及びえりも町版子育て引継ぎシートに係る連携体制案等について検討し、承認した。
令和5年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
5月22日 14時00分～ 16時00分 (第1回幼小接続円滑化推進会議兼カリキュラム検討会議)	<ul style="list-style-type: none"> ・説明1「令和5年度の計画について」 ・説明2「架け橋期のカリキュラムの素案検討及び引継ぎシート作成等について」 ・協議及び指導助言 	架け橋期のカリキュラム素案の改善の方向性及びえりも町版引継ぎシート構想案について検討し、承認した。
5月30日 15時30分～ 16時40分 (第1回幼小接続ワーキンググループ会議)		
7月19日 15時30分～ 16時30分 (第2回幼小接続ワーキンググループ会議)	<ul style="list-style-type: none"> ・架け橋期のカリキュラム案の共有 ・えりも町版引継ぎシート原案の検討 ・視察研修の最終確認 	4月以降の各幼児教育施設及び小学校の子どもを共有し、子どもの育ちや課題を整理した。 えりも町版引継ぎシートについて検討し、先進地域への視察を踏まえて様式案を作成することが決定した。

<p>9月20日 15時30分～ 16時30分 (第2回幼小接続カリキュラム検討会議)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・取組及び進捗状況報告 ・えりも町版引継ぎシート原案について ・視察研修報告 	<p>えりも町版引継ぎシートについて検討し、先進地域への視察を踏まえ、先生の負担軽減の観点から簡略化した様式にすることが決定した。</p>
<p>10月17日 15時30分～ 17時00分 (第3回幼小接続ワーキンググループ会議)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各施設の年間計画の振り返り ・アプローチカリキュラムについて 	<p>保育実践を基に先生の関わり方について協議し、成果や課題等を5歳児のカリキュラムに反映させ、実践にも生かしていくことが決定した。</p>
<p>12月13日 15時30分～ 16時30分 (第3回幼小接続カリキュラム検討会議)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・えりも町版引継ぎシートについて ・視察研修報告 	<p>えりも町版引継ぎシートの改善案について検討し、作成者によって評価基準がズレないようにする必要があるとの意見があり、再度検討することが決定した。</p>
<p>12月18日 15時30分～ 17時00分 (第4回幼小接続ワーキンググループ会議)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アプローチカリキュラムについて 	<p>子どもの現状を基に、育みたい子どもの姿について検討し、5歳児のカリキュラムに反映させることが決定した。</p>
<p>1月23日 15時30分～ 16時30分 (第4回幼小接続カリキュラム検討会議)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・えりも町版引継ぎシートの最終確認 ・「架け橋期のカリキュラム」の最終確認 ・次年度の総括、指導、助言 ・次年度への課題の提示 	<p>えりも町版引継ぎシートについて検討し、評価基準を設定した方がよいとの意見があったため再検討することが決定した。 架け橋期のカリキュラムの改善について検討し、5歳児と小学校1年生のカリキュラムを1枚に示すことが決定した。</p>
<p>2月14日 15時30分～ 16時30分 (第5回幼小接続ワーキンググループ会議)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・引継ぎシートの活用について 	<p>えりも町版引継ぎシートの活用について説明し、共通理解を図った。</p>
<p>2月28日 15時00分～ 16時00分 (第2回幼小接続円滑化推進会議)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の活動報告について ・次年度の計画について ・指導・助言 	<p>令和5年度の活動内容及び次年度の方向性について共有を図った。</p>

令和6年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
5月22日 14時00分～ 15時00分 (第1回幼小接続円滑化推進会議兼カリキュラム検討会議)	<ul style="list-style-type: none"> 令和6年度の計画について えりも町版引継ぎシート、スタートカリキュラム、架け橋期のカリキュラムの実施報告 意見交換及び指導助言 	令和6年度の事業計画及び内容等について検討を行い、承認した。
5月29日 15時30分～ 16時30分 (第1回幼小接続ワーキンググループ会議)	<ul style="list-style-type: none"> 年度の計画について 引継ぎシートの振り返り 各施設カリキュラム振り返り 	えりも町版引継ぎシートの活用状況について検討し、評価基準を再検討することが決定した。
7月12日 15時30分～ 16時00分 (第2回幼小接続ワーキンググループ会議)	<ul style="list-style-type: none"> 各施設のカリキュラム振り返り 子どもの実態把握 成果と課題の確認 	取組の進捗状況を確認し、課題があった互いの保育及び教育内容の理解や子どもの交流について、より充実を図っていく必要があることを共有した。
8月23日 15時30分～ 16時30分 (第2回幼小接続カリキュラム検討会議)	<ul style="list-style-type: none"> 取組報告 持続可能な体制づくりに向けて 指導、助言 	本事業の取組の継続に向けて必要なことについて協議し、3年間の成果を途切れさせない体制づくりについて検討していくことが決定した。
10月9日 15時30分～ 16時30分 (第3回幼小接続ワーキンググループ会議)	<ul style="list-style-type: none"> 各施設のカリキュラム振り返り 	先生や子どもの変容について交流し、取組の成果を確認した。
12月9日 15時30分～ 16時30分 (第4回幼小接続ワーキンググループ会議)	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの実態把握 成果と課題の確認 	取組の進捗状況を確認し、幼保小全体で取組への意識が高まっていることを確認した。
1月22日 15時30分～ 16時30分 (第3回幼小接続カリキュラム検討会議)	<ul style="list-style-type: none"> 取組報告 引継ぎシートの取扱いについて 年度の総括 指導、助言 	本事業終了後の取組の継続について検討し、小学校を主幹として取組を継続していくことが決定した。
2月14日 15時30分～ 16時30分 (第5回幼小接続ワーキンググループ会議)	<ul style="list-style-type: none"> 今年度の取組に係る成果と課題の検証 	各施設から今年度の取組報告を行い、今後の取組の方向性について確認した。
2月25日 14時00分～ 15時10分 (第2回幼小接続円滑化推進会議)	<ul style="list-style-type: none"> 架け橋プログラム事業における成果報告 講評 	3年間の事業報告及び講評

【佐呂間町】

令和5年度

開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
7月10日 15時30分～ 17時30分	<ul style="list-style-type: none"> ・講話「架け橋プログラム事業の意義について」 ・説明「佐呂間町わが町版架け橋プログラムの取組について」 ・協議 	2か年の事業計画、内容等について検討し、架け橋期のカリキュラムの方針が決定した。
12月20日 15時15分～ 17時15分	<ul style="list-style-type: none"> ・事業経過報告 ・中間まとめについて ・来年度の予定について 	各地区におけるワーキンググループ会議の取組や架け橋期のカリキュラム案をまとめた中間まとめについて検討を行い、承認された。



【第1回開発会議の様子（7月10日）】



【第2回開発会議の様子（12月20日）】

令和6年度

開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
8月30日 15時00分～ 17時00分	<ul style="list-style-type: none"> ・事業経過報告 ・カリキュラム実践及び振り返り（第Ⅰ期）の報告 ・カリキュラムの改善案について提示 ・協議 	カリキュラムの改善案について協議し、承認された。カリキュラムの振り返りの方法について協議し、先生の負担軽減の観点からシンプルに行っていくことが決定した。
12月23日 15時30分～ 17時00分	<ul style="list-style-type: none"> ・事業経過報告 ・カリキュラム実践及び振り返り（第Ⅱ～Ⅲ期）の報告 ・カリキュラムの改善案について提示 ・協議 	カリキュラムの最終案について協議し、承認された。



【第1回開発会議の様子（8月30日）】



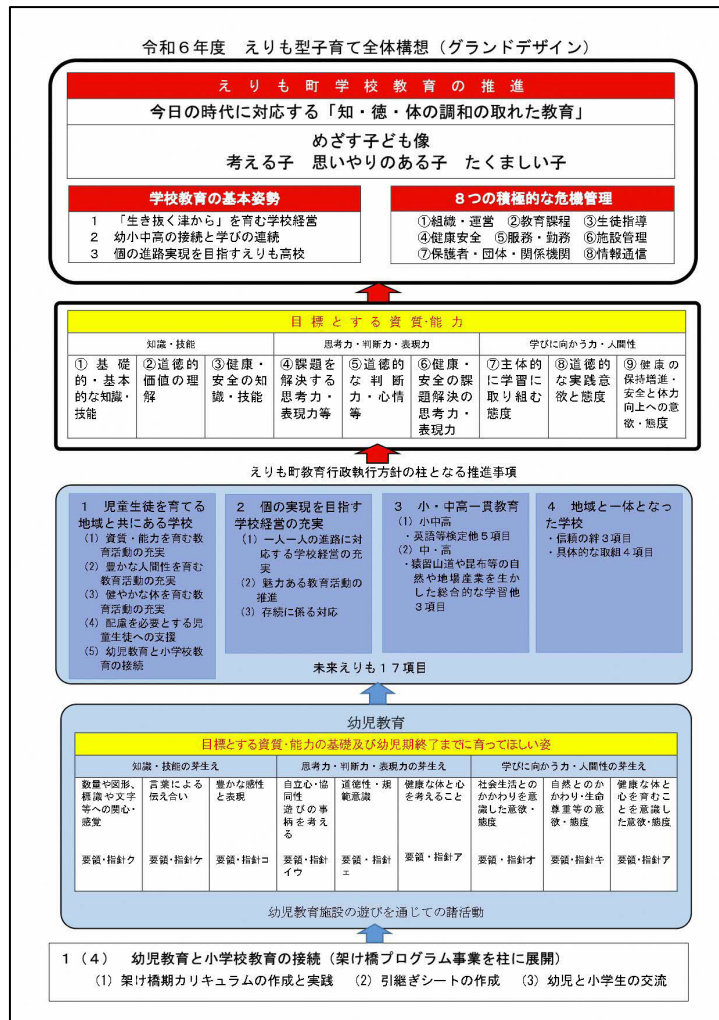
【第2回開発会議の様子（12月23日）】

3-3. 成果と課題

【えりも町】

＜架け橋期のカリキュラムに関する議論＞

- ・教育長から「えりも町子育て全体構想」が提示され、めざす子ども像や0歳から18歳までに育成を目指す資質・能力等について関係者で共有を図った。
- ・架け橋期のカリキュラム開発会議では、委員から「資質・能力ベースで学びの接続について考える取組は、えりも町の特色である。」「分かりやすい架け橋期のカリキュラムを作成してほしい。」「教育の大きな目標として『自立』『主体的』とあるが、『困ったときに助けを求めることができる』『助けてあげることができる』『頼ることができる』『頼り合える関係性』が大事である。」などの意見交換が行われた。



【えりも型子育て全体構想（グランドデザイン）】

＜会議設置による成果（○）と課題（●）＞

- 架け橋期のカリキュラム開発会議を設置したことにより、めざす子ども像や育成を目指す資質・能力について、教育関係者だけでなく子育て関係部局や保護者とも共有することができた。
- 架け橋期のカリキュラムを作成する際、保護者等の意見を反映させることができなかったことから、幼児教育施設や小学校を通じて取組内容を発信する機会を増やし周知を図っていくとともに、参観日等で意見交換ができる場を設定するなどの工夫をする必要がある。

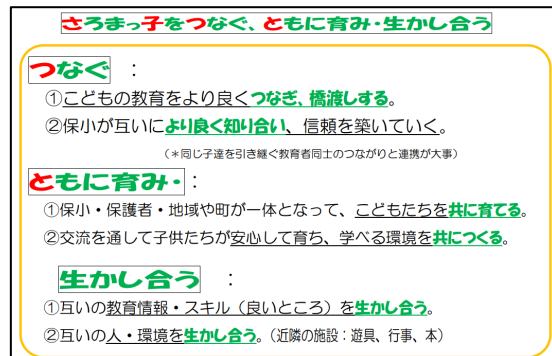
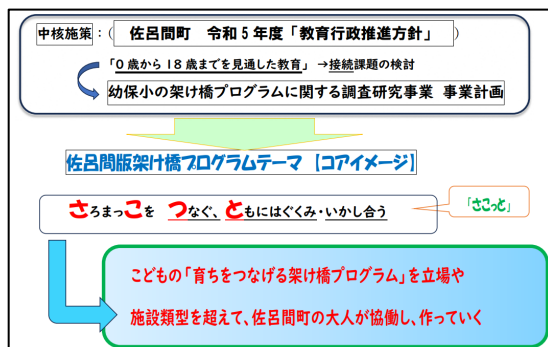
【佐呂間町】

＜架け橋期のカリキュラムに関する議論＞

- ・ 保小接続カリキュラム開発会議において、佐呂間町の架け橋プログラムの取組全体を包括する事業テーマや架け橋期のカリキュラムの方針、構成、様式等について検討した。方針等の原案については、保小接続コーディネーターが作成し提案した。
- ・ 各委員からは下記のとおり意見があり、架け橋期のカリキュラム開発のテーマは、「さろまっこをつなぐ、ともにはぐくみ・いかし合う（さこっと）」に決定した。

■ 各委員からの主な意見

- ・ 保育所と小学校の職員が、今指導している内容が、どの領域でどのようにつながっているのかということを理解できていない実情がある。
- ・ 小学校は、今まで「1年生は何もできない」、「ゼロからのスタート」というイメージをもっていたと思う。互いに分かり合った上で、保育所での学びを土台として小学校の学習があるということを積み重ねていくと、一層効果的なものになると考える。
- ・ 保育所と小学校の関係を考える上で、保育所保育指針を見ていくと多分に重なり合っている。そういったことも一度確認し合うことが大切だと考える。連携や接続に取り組むことによって、佐呂間町の子どもの成長が一層促されたということを互いに確かめ合うことも必要である。子どもの成長に留まらずに、先生方の成長ということが実は大きな部分になってくるのではないかと思う。



【佐呂間町架け橋プログラム事業テーマ】

＜会議設置による成果（○）と課題（●）＞

- 町全体の取組として幼小連携・接続の目的や意義を共有し、関係者で取組の方向性を確認できたことにより、各施設や関係部局が当事者意識をもって取組を進めることにつながった。
- 各施設や関係部局を介し、保護者や地域住民に対して幼小連携・接続に係る情報を発信したり、アンケートを実施し保護者等の意見を聴取したりするなど、保護者や地域住民とも連携を図りながら取組を進めることができた。
- 保育所や小学校以外の関係部局においても、子どもの育ちに関わる有益な情報や知見をもっているが、それを十分に活用することができなかったことから、0歳から18歳までの子どもの育ちを考える上で有効な情報を関係者でより共有していく必要がある。



【保小接続カリキュラム開発会議】

4. 架け橋期のカリキュラム

4-1. 開発プロセス

【えりも町】

(開発主体) えりも町幼小接続ワーキンググループ会議

(柱に据えた共通の視点)

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と生活科の学習過程等の共通点を探し、子どもに伸ばしてほしい力として「協同性」「言葉による伝え合い」を重点項目に設定した。

(架け橋期のカリキュラム開発の協議・プロセス)

- ①本事業実施前、小学校ではスタートカリキュラムを作成しているものの、幼児教育施設では接続を見通したカリキュラムを作成している園はほとんどない状況であった。また、保育所において幼児教育への理解が浸透しておらず、カリキュラムを作成することへの抵抗感が非常に強い状況であったことから、保育所が幼児教育への理解を深めること、カリキュラムへの抵抗感を和らげることを第一として、全4園で各園の取組等を情報共有したり、幼稚園の担当者が中心となり「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」等の理解を深めるための学習会を実施したりすることから始めた。
- ②実態として、幼児教育施設の保育者が中心となって5歳児のカリキュラムを作成することは難しかったため、保育所の勤務経験のある幼小接続アドバイザーが、小学校の担当者と共有した「共通の視点」と幼児教育施設間の実態交流を基に、5歳児の架け橋期のカリキュラム素案を作成した。
- ③小学校1年生のカリキュラムについては、小学校の教務主任と幼保小担当教諭が、町内の各幼児教育施設を複数回訪問し、保育参観等を通して幼児教育への理解を深めながら、幼小接続アドバイザーと共有した「共通の視点」を基に素案を作成した。
- ④最初は、5歳児と小学校1年生のカリキュラムを別々に作成したが、ワーキンググループ会議や幼小合同研修会で幼児教育施設の保育者と小学校の教員が顔を合わせる機会が増えたり、幼小接続アドバイザーが各施設を訪問し互いの教育内容を踏まえることの大切さを丁寧に説明したりしたこと、ワーキンググループ会議における先生の協議を中心に取組を進め、現場の意見を取り入れながら架け橋期のカリキュラムの改善を図った。

(教育内容・指導方法等の相互理解)

- ・これまで幼児教育施設と小学校との連携は引継ぎ程度であったことから、互いの指導方法や教室環境等を実際に見て学ぶことが重要であると考え、保育・授業参観の機会を設定した。
- ・幼保小合同研修会では、講師による講話を通して、幼児教育施設の保育者と小学校の教員が共に架け橋期の教育の重要性について学んだり、幼児教育施設の保育者が小学校の教育を見通しながら保育について考えることができるよう小学校生活科の学習について学んだりしながら、互いの教育について知る機会を設定した。また、幼児教育推進センターで作成している教材等を視聴し、幼児教育施設の保育者と小学校の教員で子どもへの関わり方を話し合ったり、互いの教育活動について交流したりしながら相互理解を図った。
- ・互いの教育について理解することは難しく、研修会を複数年にわたって実施するなど長い期間を要したが、研修会を重ねていく中で双方の教育への関心が高まり、教育について共に語り合う中で互いの教育の共通性に気付き仲間意識が芽生え、相互理解につながっていった。

【佐呂間町】

(開発主体) 保小接続カリキュラムワーキンググループ

(架け橋期のカリキュラム開発の協議・プロセス)

- ①全3地区でワーキンググループを開催し、小学校の管理職や教員が保育参観を行い、幼児の遊びを通じた学びについて理解を深めた後、保育所の管理職及び保育者とともに、架け橋期のカリキュラムの内容を検討した。
- ②協議では、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりにしながら、保育参観で見られた子どもの育ちについて話し合い、それが小学校の学びにどのようにつながるのかについて検討した。
- ③上記②において、5歳児の架け橋期のカリキュラムを作成する際には、「保育所保育指針解説」「保育所の年間・月・週計画」「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料(初版)」「保小接続コーディネーターの保育活動取材訪問資料」等を活用した。
- ④上記②において、小学校1年生の架け橋期のカリキュラムを作成する際には、「小学校学習指導要領」「小学校の年間指導計画」「小学校の単元配当表」「保小接続コーディネーターの教育活動取材訪問資料」等を活用した。
- ⑤各地区のワーキンググループは、協議のテーマを焦点化しながら複数回にわたって実施した。また、保育活動が小学校の学習にどのようにつながっていくのかが分かりやすい様式の工夫についても検討した。



【ワーキンググループの協議】

(柱に据えた共通の視点)

- ・架け橋期のカリキュラム開発会議で決定した「さろまっこをつなぐ、ともにはぐくみ・いかし合う」という方針の下、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「協同性」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現力」に重点をおくとともに、佐呂間町の子どもの実態や地域性を踏まえ、「豊かなコミュニケーション力」をプラスワンの力として加え、6つの力を統合的に育ていけるよう架け橋期のカリキュラムを作成した。

(教育内容・指導方法等の相互理解)

- ・保育士と教員が、「期待する子ども像」や「子どもの育ち」について協議する中で、例えば、子どもの自立を促すための先生の関わりが同じであることに気付くなど、教育内容や指導方法等の違いがあっても、「子どもをよりよく育てたい」という願いは同じであるということが分かり、互いの教育の理解を深めことの大切さを感じるとともに、協働意識の高まりへとつながった。
- ・保小接続カリキュラム開発会議及びワーキンググループにおいて、保育参観・授業参観へ行くことができなかった先生も、実際の子どもの遊びや学びの姿を通して架け橋期のカリキュラムを考えることができるよう、保育や授業の様子を撮影した映像資料を作成した。
- ・保育士や教員は勤務時間の関係で協議に参加できる時間帯が限られていることから、移動時間を短縮し協議の時間をより多く確保するために、近隣の保育所と小学校がペアになりワーキンググループを実施できるよう工夫した。

4-2. 架け橋期のカリキュラムの概要

【えりも町】

(工夫した点やポイント)

- ・ 幼児教育施設の保育者が、「育ってほしい子どもの姿」を意識しながら幼児一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり、必要な援助を行ったりすることができるよう、小学校の教員が、幼児教育で生まれた資質・能力を踏まえながら、その資質・能力を更に伸ばす視点で指導することができるよう、具体的な子どもの姿を明記した。
- ・ 幼児教育施設の保育者が小学校の教科指導へのつながりを意識しながら保育することができるよう、小学校生活科の単元を記載した。

【えりも町 架け橋期のカリキュラム】

(既存の接続を見通した各園・校の教育課程や指導計画等との相違点)

- ・ 接続を見通したカリキュラムを作成している幼児教育施設はほとんどなく、小学校のスタートカリキュラムについては文字ばかりの表で十分な活用がなされていなかった。
- ・ スタートカリキュラムについては「小学校1年生の担任の拠り所として、手元に置き毎日開きたくなり、日常的に活用することができる」「幼児教育施設の声を反映し、ゆるやかな接続を目指す」ことをコンセプトとして改善を図った。

【佐呂間町】

(工夫した点やポイント)

- ・ 架け橋期のカリキュラムの「学ぶ力」「生きる力」「関わる力」については、保育・教育活動において資質・能力の育成を意識して指導することができるよう、「活動内容+資質・能力」を基本として整理した。また、「伝え合う力」「数量感覚」「自立・探究」「表現力・自己調整力」「関係調整力」「支える力」を視点として、5歳児と小学校1年生の資質・能力のつながりが分かるよう整理した。

【佐呂間町 架け橋期のカリキュラム】

- ・ 架け橋期の2年間で育む資質・能力のつながりや全体像が分かる概要版、接続を見通した指導のポイントを示した解説版を作成した。
- ・ 5歳児のカリキュラムについては、季節の活動を除き、基本的に通年の活動として位置付け、小学校1年生のカリキュラムについては、通年の活動となるものには印をつけ整理した。

(既存の接続を見通した各園・校の教育課程や指導計画等との相違点)

- ・ スタートカリキュラムについては、幼児期に生まれた資質・能力や架け橋期に大切にしたい学びのプロセスを意識しながら指導することができるよう、「周囲の環境に主体的に関わる力」「興味・関心・意欲・好奇心」「探究・発見・試す力・疑問」「協同性・共感する力」「心動かす体験・諸感覚」を引き出す文言を加え、整理した。

4-3. 架け橋期のカリキュラムの実践

【えりも町】

（実践内容）

- ・小学校では、1年生が入学当初から安心して学校生活を送ることができるよう、子どもが慣れ親しんだ幼児教育施設的环境を取り入れながら教室環境等を整備した。
- ・小学校では、幼児期の体験や育まれた資質・能力を踏まえた指導が行われるよう、子ども自身が幼児期に体験したことを話すことができる場面を意識して設定したり、幼児教育施設の保育者の指導方法を参考にしたりするなどの工夫を行った。
- ・小学校では、子どもが安心感をもって落ち着いて1日をスタートさせることができるよう、登校後、絵本の読み聞かせや幼児教育施設で慣れ親しんだ遊びなどを行う「なかよしタイム」を設定した。
- ・幼児教育施設では、一人一人の子どもがやりたい遊びに没頭できるよう環境を工夫したり、協同性を育むことができるよう、友達との関わりが生まれる遊びを工夫したり、サークルタイムを取り入れ話合いの機会を設定したりした。
- ・他園の幼児と一緒に活動し、互いの交友を深めたり、遊びを通して伝えたり話し合ったりすることができるよう、幼児教育施設が連携し、幼児同士の交流会を企画・実施した。

（課題及び改善）

- ・幼小接続ワーキンググループ会議を中心に、幼児教育施設の保育者と小学校の教員が複数回にわたって子どもの実態を交流し、架け橋期のカリキュラムの取組について検証したところ、「道徳性・規範意識の芽生え」にも課題が見られたことから、「育ててほしい子どもの姿」の重点に追加した。
- ・架け橋期のカリキュラムの配慮事項については1年をⅢ期に分けて記載していたが、子どもの成長には連続性があり、特に5歳児については年間を通して大切にしたい関わりを記載した方がよいとの意見があり改善を図った。
- ・えりも町架け橋期カリキュラムと各幼児教育施設の活動を踏まえながら作成した各幼児教育施設のカリキュラムには、保育の振り返りを記載する欄を設けており、幼保合同研修会でその振り返りを交流し、保育内容や保育者の関わりについて互いにアドバイスをし合うことにより、各幼児教育施設の保育の改善を図った。

えりも町「架け橋期カリキュラム」																									
考える子・思いやる子・たくましい子																									
めざす子ども像	①基礎的・基本的な知識・技能 ④課題を解決する思考力・表現力 ⑦主体的に学習に取り組む態度										②道徳的価値の理解 ⑤道徳的な判断力・心構え ⑧道徳的な実践態度と態度		③健康・安全の知識・技能 ⑥健康・安全の課題解決の思考力・判断力 ⑨健康の保持促進・安全と体力向上への意欲、態度												
	時期	年長児（5歳児）					第1学年（6歳児）					10の姿													
育つてほしい子どもの姿	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	10の姿
【意図】 幼児教育施設から小学校へ入学する子どもは、入学前までに「考える子・思いやる子・たくましい子」の姿を身に付けてほしい。	<p>①基礎的・基本的な知識・技能 ④課題を解決する思考力・表現力 ⑦主体的に学習に取り組む態度</p> <p>②道徳的価値の理解 ⑤道徳的な判断力・心構え ⑧道徳的な実践態度と態度</p> <p>③健康・安全の知識・技能 ⑥健康・安全の課題解決の思考力・判断力 ⑨健康の保持促進・安全と体力向上への意欲、態度</p>												10の姿												
主な活動・単元と行事	<p>入学・入園式 運動会 お楽しみ会 クリスマス会 1年生 2年生 3年生</p>												10の姿												
配慮事項	<p>・入学前までに「考える子・思いやる子・たくましい子」の姿を身に付けてほしい。</p> <p>・入学前までに「考える子・思いやる子・たくましい子」の姿を身に付けてほしい。</p>												10の姿												
幼児小連携	<p>・入学前までに「考える子・思いやる子・たくましい子」の姿を身に付けてほしい。</p> <p>・入学前までに「考える子・思いやる子・たくましい子」の姿を身に付けてほしい。</p>												10の姿												
家庭との連携	<p>・入学前までに「考える子・思いやる子・たくましい子」の姿を身に付けてほしい。</p> <p>・入学前までに「考える子・思いやる子・たくましい子」の姿を身に付けてほしい。</p>												10の姿												

【えりも町修正後の架け橋期のカリキュラム ※赤枠が改善箇所】

【佐呂間町】

(実践内容)

- ・ 小学校では、架け橋期のカリキュラムの概要版で各単元の学習活動につながる幼児期で育まれた資質・能力を確認し、次の視点を大事にし、単元の指導計画及び本時の学習を構想した。
 - * 子ども同士が豊かなコミュニケーションをもつことができる活動を位置付ける。
 - * 「わくわく」「やってみたい」「気付く」「発想する」等の学びのプロセスを重視する。
 - * 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえる。
- ・ 小学校では、登校後、自分で好きな遊びを選択して取り組むことができる「おひさまタイム」を設定し、子どもが安心して過ごすことができる環境を整備した。
- ・ 保育所では、架け橋期のカリキュラムの概要版で、各保育活動につながる小学校の学習活動を確認し、小学校入学後の子どもの学びをイメージしながら幼児期に必要な遊びや活動に取り組めるよう、次の視点を大事にし、保育の指導計画を構想した。
 - * 子どもが主体的に「やってみたい」という気持ちを発揮できるようにする。
 - * 「待つ」「促す」「問う」「見守る」などの先生の関わりを大切にし、子どもの「自分たちでできる力」の伸長に配慮する。

(課題及び改善)

- ・ 5歳児と小学校1年生の担任が、架け橋期のカリキュラムの活用事例や改善点等を振り返り表に記入した後、管理職、担任及び保小接続コーディネーターで振り返りを行い、架け橋期のカリキュラムの改善を図った。
- ・ 既存の架け橋期のカリキュラムでは、保育所と小学校で行っている活動について理解することはできるが、どのように子どもの資質・能力を伸ばさせることができるのかについては分からなかったという課題があったことから、架け橋期のカリキュラムの内容を補完する「解説版」を作成することとした。
- ・ 解説版では、保育所が小学校教育を見通して保育できるよう、小学校が幼児期に育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施できるよう、指導の工夫やポイント等を示した。

アプローチカリキュラム 振り返り表第Ⅱ期	
第Ⅱ期【遠征期】ホップ 8月・8月	
月	内容
8月	各クラスの子と1となる異級・異学年の交流 ①元気がいっぱい遊ぼう *思いを伝え合い経験を広げる ②「10の殻」を整理しながら、よく取り組んだ...◎ 取り組んだ...◎ ◎で、記入下さい
学ぶ力	言葉 聞く(聴かす) ◎ 共感しながら聞く◎ 会話 ◎ 体験・思いを伝える◎ 指示物 文字に親しむ・読もうとする◎
	環境 制作・散策 ◎ 素材の数や形に気付く◎ 身の回りの数 ◎ 合わせていくつ・多い少ない◎ お世話 ◎ 動物の命を育む◎ 収穫・調理 ◎ 第Ⅱ期 野外観察 ◎ (生き物・植物や虫、小動物)に親しみ関心◎
表現	制作 ◎ 素材を生かした造形◎
健康	生活・安全 ◎ 安全な遊び方・休憩、衣服の調節や衛生◎
人間関係	自ら行動◎ ◎ 自分からやってみよう、勇気を持って行うこと ◎ 友達や先生に共感し遊ぼうとする ◎ 友達や先生に共感し遊ぼうとする ◎ 友達や先生に共感し遊ぼうとする
	共感・励まし◎ ◎ 友達や先生に共感し遊ぼうとする ◎ 友達や先生に共感し遊ぼうとする ◎ 友達や先生に共感し遊ぼうとする
	良い言葉◎ ◎ 友達や先生に共感し遊ぼうとする ◎ 友達や先生に共感し遊ぼうとする ◎ 友達や先生に共感し遊ぼうとする
	聞く・話す・食べる◎ ◎ 聞き方・話し方、食べ方などを身に付けていく。運動・見守り

【振り返り表】

5. 自治体の支援

5-1. 研修の実施

【道】

<実施した研修の概要>

令和4年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
7月～2月に各教育局が設定した日	幼小連携・接続担当者研修	オンライン	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児教育に関わる市町村、市町村教育委員会の職員 ・幼稚園、保育所及び認定こども園、特別支援学校幼稚部の職員 ・小学校の幼児教育連携担当者等 	説明 「幼児教育と小学校教育の連携・接続ハンドブック」 説明・協議 「幼小連携・接続の好事例」 説明・協議 「幼小連携・接続を推進する自治体の役割」
令和5年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
1月30日	小学校管理職研修	オンライン・オンデマンド配信	<ul style="list-style-type: none"> ・市町村立小学校、義務教育学校の校長・教頭 ・市町村教育委員会・市町村の職員 ・教育局教育支援課長 	講演・協議 「子どもの育ちと学びをつなぐ架け橋期の教育の充実」 実践発表 「幼保小の協働による架け橋期のカリキュラムの作成」
7月～2月に各教育局で設定した日	幼小連携・接続担当者研修	オンライン	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児教育に関わる市町村、市町村教育委員会の職員 ・幼稚園、保育所及び認定こども園、特別支援学校幼稚部の職員 ・小学校の幼児教育連携担当者等 	説明 「幼児教育と小学校教育の円滑な接続」 説明・協議 「幼小連携・接続の現状と推進に向けた取組」 説明・協議 「幼小連携・接続の推進に向けた地域の取組」
令和6年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
2月20日	北海道版幼児教育スタートプログラム事業成果報告会	オンライン・オンデマンド配信	<ul style="list-style-type: none"> ・国公立の幼児教育施設の施設長、園長、副園長、教諭、保育教諭、保育士 ・国公立小学校の校長、副校長、教頭、主幹教諭、教諭 ・道立特別支援学校の校長、副校長、教頭、教諭 	説明 「北海道版幼児教育スタートプログラム事業について」 基調講演 「子どもが主体的に自己を発揮しながら学び続けるために」 実践発表・トークセッション・講評 「えりも町・佐呂間町による実践発表」

			<ul style="list-style-type: none"> ・市町村教育委員会の職員 ・北海道及び市町村の保育行政担当者等 ・各教育局義務教育指導班指導主事 ・北海道幼児教育相談員 	
7月～2月に各教育局で設定した日	幼小連携・接続担当者研修	オンライン	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児教育に関わる市町村、市町村教育委員会の職員 ・幼児教育施設の管理職及び保育者 ・特別支援学校幼稚部の管理職及び教員 ・小学校の管理職及び教員 	<p>【オンデマンド配信】 「幼保小の接続の現状と課題」 「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を手掛かりとした保育・教育の工夫」</p> <p>【オンライン研修】 説明 「管内の幼保小の悦族の現状と課題」</p>

<研修の成果（○）と課題（●）>

- 北海道版幼児教育スタートプログラム事業成果報告会においては、オンデマンド受講者を含め約 230 名の参加があり、参加者から「架け橋プログラムを進める上での課題や苦労についても知ることができ、軌道に乗るまでが大変だと思ったが、子どもの変容につながる取組であることが分かったので、私たちも取り組んでみようと思った。」との意見があるなど、幼保小の架け橋プログラムが子どもの育ちを促す重要な取組であることへの意識啓発を図ることができた。
- 小学校管理職研修においては、参加者から「架け橋期の『子どもの思いを大切に作る』といったカリキュラムづくりが、今、学校に求められている教育の姿とリンクし、意識改革のスタートラインになる可能性を強く感じた。」「カリキュラムの考え方として『子どもを育てる』学校から、『子どもが育つ』学校へ、教師も保護者も意識をかえていかなければならないと思った。」との意見があるなど、架け橋期の教育の重要性の理解浸透や架け橋期のカリキュラム開発への意識啓発を図ることができた。
- 幼小連携・接続担当者研修においては、保育及び授業の写真を通して互いの教育について理解を深める講座や自治体を含む関係者が協議する講座を設定したことにより、参加者からは「幼保小の先生や自治体の職員と話し合う機会があり、今後の地域の取組を考えるきっかけができた。」「互いの教育について知らないことが多かったので、ねらいや内容について知る機会になった。」との意見があるなど、互いに連携・協働することの意義やねらいについての理解浸透を図ることができた。
- 一方で、各種研修において幼児教育施設の保育者の参加者は増えており、幼保小の架け橋プログラムへの意欲の高まりが見られているが、小学校教員や自治体職員の参加が少ないことが課題となっている。幼児教育施設の参加者からは、「自治体に働きかけても、何も動きがない。」といった意見があることから、小学校担当課と連携し、研修会への参加を働きかけるなど、小学校や自治体へ架け橋プログラムの推進について理解を求めていく。また、市町村において関係者が話し合う会議体が十分に機能していない地域もあることから、引き続き、相互理解を深めるための講座や接続に向けた地域の取組について協議する講座を設定するなどの支援を行っていく必要がある。

【えりも町】

<実施した研修の概要>

令和5年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
5月25日	幼保小合同研修会	オンライン	町内幼児教育施設職員及び小学校教職員	<ul style="list-style-type: none"> ・「架け橋期」の教育の充実について ・幼保小の引継ぎの工夫について ・えりも町の今後の取組について
6月14日	幼保合同研修会	集合	町内幼児教育施設長、担当保育士・教諭	第1回ワーキンググループ会議を経て、不明点の共有
7月4日	幼保合同研修会	集合	町内幼児教育施設長、担当保育士・教諭	カリキュラム開発に係る意見交換及び情報共有
9月15日	幼保合同学習会	集合	町内幼児教育施設長、担当保育士・教諭	カリキュラム開発に係る意見交換及び情報共有
11月30日	幼保小合同研修会	オンライン	町内幼児教育施設職員及び小学校教職員	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児教育と小学校教育の違いについて ・架け橋期のカリキュラムについて ・生活科について ・各幼児教育施設、小学校で行うこと

令和6年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
7月2日	幼保小合同研修会	集合	町内幼児教育施設職員及び小学校教職員	<ul style="list-style-type: none"> ・滋賀県教育委員会で作成した幼保小架け橋実践事例DVD「つなぐ」を視聴し、幼児期の育ちを「10の姿」を通してどう捉えるかを学んだ。 ・北海道幼児教育推進センター配信オンデマンド教材を視聴後、グループ討議を行い、施設類型の違いを超えて子どもの姿を語り合い、互いの保育、教育の共通理解を図った。
7月30日	幼保合同研修会	集合	町内幼児教育施設職員	<ul style="list-style-type: none"> ・滋賀県教育委員会で作成した幼保小架け橋実践事例DVD「つなぐ」を視聴し、幼児期の育ちを「10の姿」とおしてどう捉えるかを学びグループ討議した。
11月13日	幼保小合同研修会	集合	町内幼児教育施設職員及び小学校教職員	幼児教育施設職員が、小学校の授業参観をした際に感じたことや疑問点を交流し、理解を深めた。

<研修の成果(○)と課題(●)>

- 本事業開始当初は、「保育は保育であり、幼児教育ではない」「何をすればよいのか分からない」といった戸惑いの声が多々あったが、研修会を複数回実施し、講師による講話を通して「接続期に育ち、芽生えるもの(非認知能力)」や「幼児教育と小学校教育の違い(幼児教育は方向目標、小学校教育は到達目標)」等について理解を深めたことにより、架け橋期の教育の重要性を理解した上で架け橋期のカリキュラムの内容を検討することができた。
- 幼保合同研修会において、各施設で実践している保育内容を交流したことにより、他施設の保育をよさ取り入れ、保育の改善が図られた。
- 研修会において、参加者同士で日々の教育について振り返ったり、思いや不安を共有したりしたことにより、本事業の取組に留まらず、教職員が個々に学びを深めていくようになった。
- 担任や担当だけでなく、全職員が幼保小の架け橋プログラムの取組を理解することができるよう、全職員が研修会に参加できる研修日程等を工夫する必要がある。

【佐呂間町】**<実施した研修の概要>**

令和5年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
7月10日	保小の合同研修会	オンライン	町内幼児教育施設の保育士及び小学校の教職員	「架け橋プログラム」の目的や取組内容について

令和6年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
1月17日	佐呂間町保小合同研修会	集合	町内幼児教育施設の保育士及び小学校の教職員	「子どもの遊び・学びの架け橋」～ 子ども主体の保育・授業をどう創るか ～

<研修の成果（○）と課題（●）>

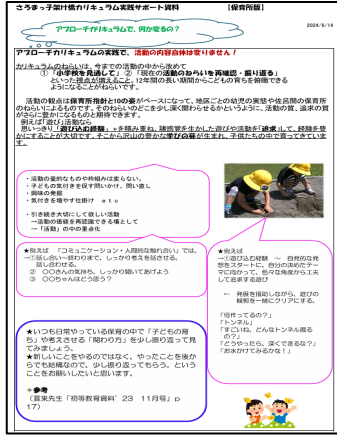
- 講師による講演を聞いた保育士や教職員からは、「教育は積み重ねであり、互いをもっとよく知ることが大切であることが分かった。」「幼児教育で行っている活動が将来どこにつながっていくのか、保育所の職員も意外と理解できていなかったが、非常に重要であることを改めて感じた。」「よく『ピカピカの1年生』という言い方をしてしまうことがあるが、小学校1年生の学びがゼロからスタートするわけではないことを改めて理解できた。」といった感想が聞かれ、本事業について理解を深めることにつながった。また、その後行われたワーキンググループにおいて積極的に参加する様子が見られ、架け橋期のカリキュラム作成に対する保育士や教職員の意識の高まりへとつながった。
- 幼児教育施設と小学校との連携や円滑な接続に向けた取組がよりよいものになるよう、保育士や教職員の疑問や課題の解決につながる研修を工夫する必要がある。

【佐呂間町】

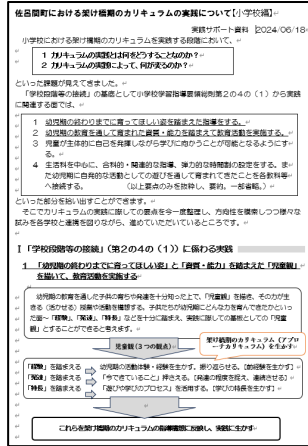
＜作成した教材等の概要＞

* 実践サポート資料

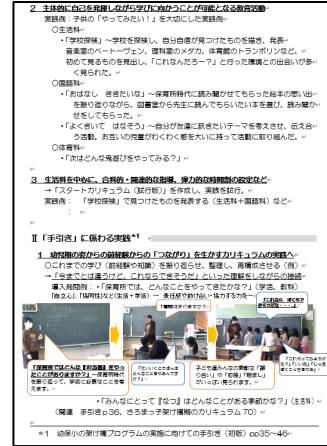
保育所及び小学校において、架け橋期のカリキュラムの実践の充実が図られるよう、保小接続コーディネーターが実践のポイントやよかった点などをまとめた実践サポート資料を作成し、実践者等と確認や振り返りを行った。



【保育所用実践サポート資料】



【小学校用実践サポート資料】



* 保育及び授業映像資料

(1) 保育・教育活動の映像資料

架け橋期のカリキュラムを開発前に、ワーキンググループ等において保育者と小学校教員が互いの教育についての理解を深めながら架け橋期のカリキュラムの内容を検討することができるよう、保小接続コーディネーターが保育所及び小学校を訪問し、保育・教育活動の映像資料を作成した。



【保育活動の映像資料】



【教育活動の映像資料】

(2) 実践のまとめビデオクリップ

保小接続カリキュラム開発会議やワーキンググループ、合同研修等において、参加者が具体的な実践場面を視聴しながら、架け橋期の教育の意義や子どもの育ちについて考えることができるよう、保小接続コーディネーターが保育所及び小学校を訪問し、架け橋期のカリキュラムの実践映像資料を作成した。

＜教材等の成果(○)と課題(●)＞

- 架け橋期のカリキュラムの実践を行う上で、どのような保育や学習活動を行っていくかを担当と保小接続コーディネーター共に考える上で、実践サポート資料は非常に有効だった。
- 保育・教育活動の映像資料を活用したことにより、架け橋期のカリキュラムの実践を振り返り、改善に向けた工夫について考えることができた。また、子どもの姿を通して、架け橋期の保育・教育の意義を確認し合うことができた。
- 実践のまとめビデオクリップは、保小接続コーディネーターの各施設への訪問日に併せて撮影したことから、内容に偏りがあった。今後は、各施設の月案・週案、単元配当表や時間割等を事前に情報提供してもらい、映像資料をバランスよく撮影する必要がある。

5-3. その他の支援

【えりも町】

<その他の支援の概要>

- * 幼保小の架け橋プログラム啓発資料
 幼小接続アドバイザーが、各小学校の1日入学の際、新1年生の保護者に本事業で行っている取組を周知するために資料を作成し、配付した。

<成果 (○) 及び課題 (●) >

- 啓発資料を配付し、幼保小の架け橋プログラムの取組について説明したことは、特に、第1子が小学校に入学する保護者にとって入学への不安軽減につながった。



【架け橋プログラム啓発資料】

【佐呂間町】

<その他の支援の概要>

- * 佐呂間町保小をつなぐ架け橋通信「さこっと」
 保育者、小学校教員、保護者、地域住民等が幼児期及び架け橋期の教育の重要性を理解し、関係者がみんなで子どもの育ちを見守っていくことができるよう、保小接続コーディネーターが、保育所の遊びを通してどのような資質・能力が育まれ、それをどのように小学校教育へとつないでいくのかといった具体的な実践を紹介する保小をつなぐ架け橋通信を作成し、全7回発行した。



【架け橋通信「さこっと」】

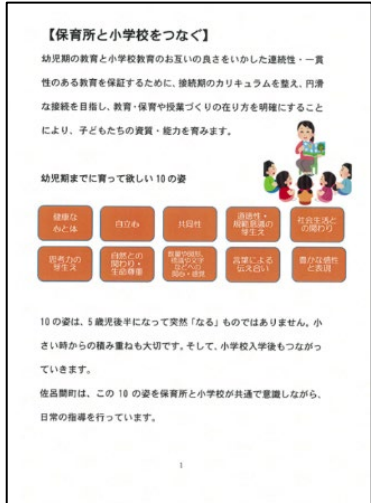
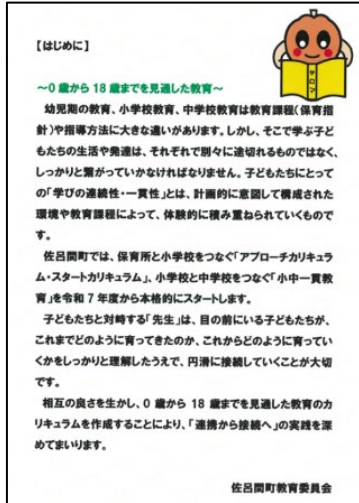
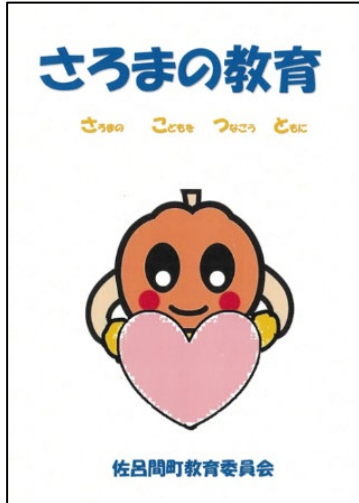
- * リーフレット「学びの地図」
 4月当初に保育所及び小学校の保護者全戸に架け橋期のカリキュラムを配付した。保護者とその目的や活用方法などを理解することができるよう、解説した資料を作成した。



【学びの地図】

* 「さろまの教育」

保護者や地域住民が、幼児期の教育から中学校教育までの学びの連続性や健やかな育ち、佐呂間町の教育への理解をより一層深めることができるよう、佐呂間町教育委員会において、図やイラストを用いて分かりやすく解説したリーフレットを作成した。今後、保護者及び地域住民に配布する予定である。



【さろまの教育】

<成果 (○) 及び課題 (●) >

- 架け橋通信「さこっと」を保護者や教職員等に広く配付したことにより、架け橋期の教育の重要性や架け橋期のカリキュラムについての理解が浸透した。また、架け橋通信「さこっと」を通して、開発会議やワーキンググループの委員、関係部局職員にも取組を共有することができたことにより、関係者の本事業の推進への機運が高まった。
- 「学びの地図」は、架け橋期のカリキュラムを保護者に周知を図る上では効果的であったが、保護者の理解がどの程度図られたかなどを把握する必要があることから、各施設の保護者懇談会等で感想を聞いたり、アンケートを実施したりすることが考えられる。

6. 本事業に取り組んだことによる成果

6-1. 自治体における成果

<自治体における成果>

【道】

本事業実施前の令和3年度、授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われているステップ3及び4の市町村の割合は29.8%であったが、令和6年5月1日現在で56.7%へと増加した。また、小規模自治体を中心に、教育行政執行方針に幼児期から義務教育終了までの教育の充実が掲げられるようになるなど、市町村教育委員会への幼児期及び幼保小接続期の重要性の理解が浸透してきている。その要因としては、幼保小の接続に係る研修は、市町村教委及び市町村幼児教育担当課の職員も参加対象とするなど研修の機会を確保し、指定地域の幼保小の架け橋プログラムの取組事例や成果について発信したことにより、幼児教育と小学校教育との円滑な接続が各地域の教育の充実につながるという実感につながったことが考えられる。また、指定地域の架け橋期のカリキュラム開発の手順や架け橋期のカリキュラムの内容等を理解したことにより、取組への見通しをもつことができ、各市町村の取組へとつながっていると考えられる。

【えりも町】

本事業実施前は、私立幼稚園、公立保育所、公立小学校の交流は、1日入学や引継ぎのみであったが、本事業に取り組んだことにより、私立・公立・施設種の垣根や立場を越えて連携・協働することができ、「子どもを育てる」という同じ目的に向かって一体感をもって保育及び教育を行うことができたこと、会議や研修会を通じて職員同士の交流が深まり、横のつながりをもつことができたことが成果である。

また、本町は小規模地域であることから、各施設同士が密に連携し合うことができる環境がより実効性を高めた要因であり、本町の強みでもある。

さらに、幼児は交流会を何度も行ったことにより、顔見知りが増え入学後の不安材料が減り、より安心感をもって小学校生活をスタートすることができた。

指定地域としての取組は終了するが、来年度以降も取組を継続し、本町の取組の推進に邁進していきたい。

【佐呂間町】

- ・ 町内の保育所、小学校、中学校及び高等学校が立場の違いを越えて、0歳～18歳を見通した教育を考える上で、架け橋期の子どもの学びの接続が重要であることについて共通理解を図ることができた。
- ・ 子どもを育むための関係者（保護者、教育関係者、保健福祉課、有識者）が一堂に会し、立場の違いを越えて子どもたちの成長を協働し、支えていくための組織基盤及び共通の目標ができた。
- ・ 保育所の保育者と小学校の教員が、架け橋期のカリキュラムを協働して作成する中で、情報交換をしたり、互いの教育について理解し架け橋期の教育方法を見直したりしたことにより、互いの信頼関係を深めることにつながるとともに、指導技術を高める機会となった。また、互いの保育及び授業に対して、価値付けや助言等をしやすい関係の構築につながった。
- ・ 架け橋期のカリキュラムを作成したことにより、保育所と小学校が互いの保育・教育について理解することができるようになり、互いの活動に対して一層の理解や協力が得られるようになった。
- ・ 5歳児と小学校1年生の担任が、架け橋期のカリキュラムの実践を工夫し、保育や授業について振り返る中で成果や手応えを感じたことが、主体的に保育・授業改善を図っていくことにつながった。

- ・ 幼児と児童の交流活動を実施したことにより、子ども同士のつながりを一層深めることができたとともに、保育所の保育者と小学校の教員の情報交換の機会にもなった。
- ・ 架け橋期の教育を起点にしながら、教育行政機関と保護者が子どもの望ましい育ちについて共に考え、連携しながら子どもに支援する機会が増えた。

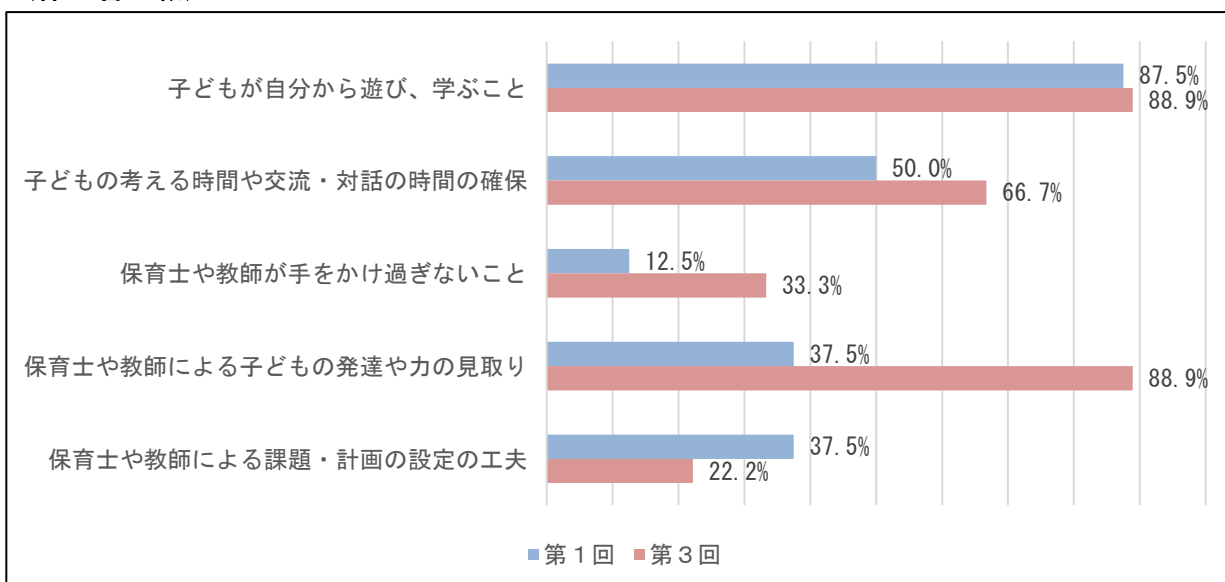
<定量的・定性的な調査結果>

【佐呂間町】

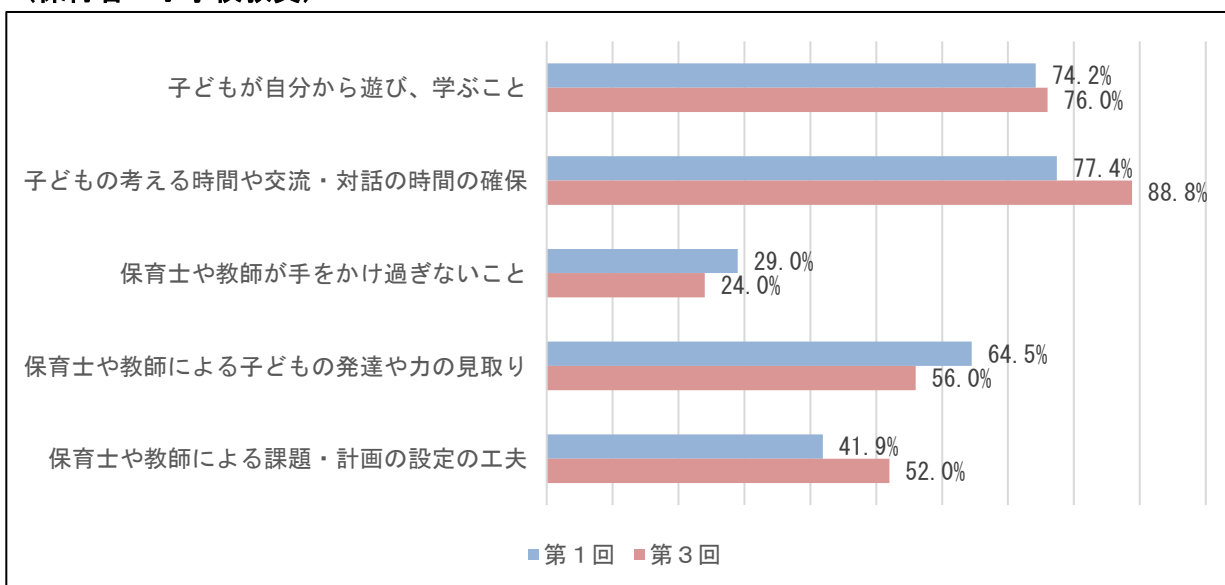
* 「保小管理職」「保育者・小学校教員」「保護者」「中学校・高等学校・関係部局」を対象に、「保育所と小学校を結ぶためのアンケート」を令和5年度に1回、令和6年度に2回、計3回実施した。

■ 設問「子どもの豊かな想像力や思考力を遊びや学びを通して育むためには、どのようなことが大切だと考えますか。（複数回答可）」

（保小管理職）

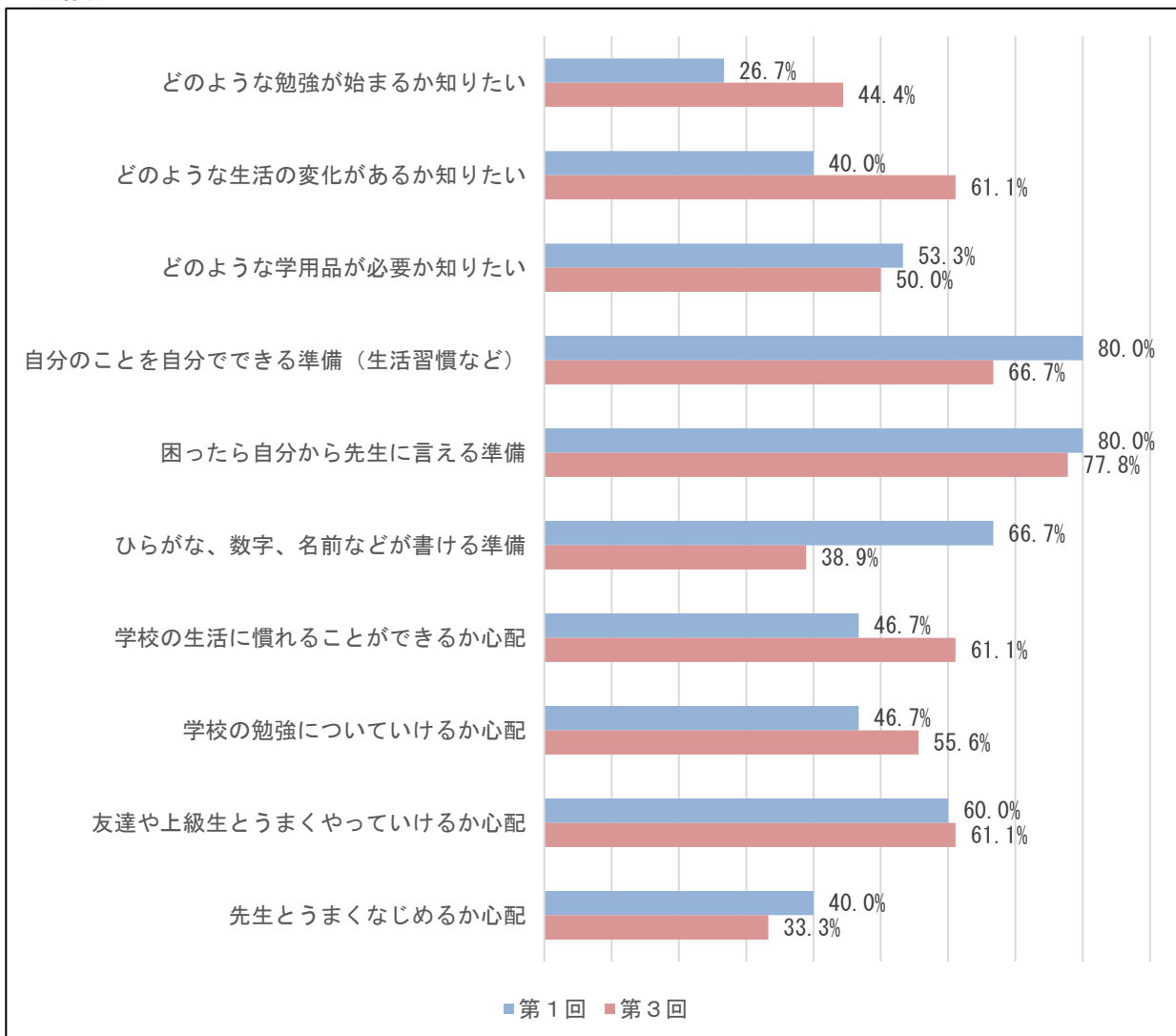


（保育者・小学校教員）



- ・管理職、保育者・小学校教員共に、子どもが自ら遊び、学ぶことは大切であると考えている割合が高い。
- ・管理職については、子どもの資質・能力を育むために保育士や教師による子どもの見取りが大切だと考える割合が大きく増加した一方で、保育者・小学校教員は子どもの考える時間や交流・対話、課題・計画の設定の工夫が大切であると考えている割合が増加した。
- ・保育者・小学校教育については、課題・計画の設定の工夫が大切であると考えている割合が増加した。

■ 設問「入学に向けて、知りたいこと、心配なこと、準備が必要だと感じることはどのようなことですか。（複数回答可）」
（保護者）



- ・本事業実施以前は、小学校入学に当たってひらがな、数字、名前などが書ける準備が必要と考えていた保護者の割合が高かったが、事業実施後、その割合が減少した。
- ・「どのような生活の変化があるのか知りたい」「学校の生活に慣れることができるか心配」「学校の勉強についていけるか心配」の割合が増加し、架け橋通信や架け橋期のカリキュラムを保護者に配付するなどの取組を行ったことにより、幼児教育施設と小学校の学びや生活の違いに関心をもつようになってきたと考えられる。

■ 関係者の意識の変容

(保小管理職からの意見)

- ・先生方が手を出しすぎず、子どもに任せたり見守ったりする場面が増えてきている。子どもたちが「やりたい。」という気持ちを表出させることができるようになってきており、主体的に学ぶことが増えてきている。
- ・小学校の教員が、保育所での遊びの内容やねらいを知ることで、児童理解が深まり、小学校での学習課題の設定に工夫が見られるようになった。
- ・小学校教員が、保育所から小学校のつながりをより意識して子どもの成長を見取ることができるようになった。
- ・保育所の保育者自身が、自分の保育を振り返りながら、「次はこうしてみよう」という意欲の高まりが出てきた。

■ 取組の成果

(保小管理職からの意見・感想等)

- ・保小で交流し、関係者で佐呂間町の子どもたちに身に付けさせたい力についての共有ができたこと、保育所や小学校で交流活動ができたこと、架け橋期のカリキュラムの整備、10の姿について保小の職員が知ることができたなどの成果が上がっている。

(保育者・小学校教員からの意見・感想等)

- ・入学した子どものことをたくさんの目で見ることで、子どもたちは安心して学校生活を送ることができている。
- ・保小の交流の中で、思いやりの気持ちをもって接する場面を見ることができ、子どもたちのよさに気付くことができた。
- ・小学校1年生が、保育所の先生から成長を認めてもらいたくさん褒めてもらったことが、子どもたちはとても嬉しく、自己肯定感の高まりにもつながったと思う。
- ・始まったばかりの幼保小の架け橋プログラムだが、丁寧に子どもの育ちを見守っていることがよいと感じている。

(保護者からの意見・感想等)

- ・架け橋通信「さこっと」により、保育所と小学校との交流内容が分かり、連携して子どもを見てくれていることを嬉しく思った。
- ・保育所から小学校へ切れ目なく連続して教育活動が行われていることに安心感がある。
- ・家庭でのルールや習慣、生活リズムを整えることを考えるきっかけになっている。
- ・小学生との交流があった日がとても楽しかったようで嬉しそうにその日の出来事を話してくれた。入学前に小学生との関わりがあるのは親にとっても安心した。
- ・子どもが小学校へ行き、1年生と活動できたのがとても楽しかったようだ。小学校を全く知らないで入学するより安心感があると思う。

6-2. 園・校における成果

【えりも町】

<先生方の指導と子供の姿の変容>

- ・改訂したスタートカリキュラムを十分に活用し、幼児期の特性や幼児教育施設での活動等を踏まえた指導を行うようになったことにより、例年小学校1年生に見られた登校渋りもなく、子どもがのびのびと楽しそうに自分らしく学校生活を送る姿が見られるようになった。
- ・小学校1年生の担任が、幼児教育施設での経験を引き出す発問を意識してするようになったことにより、子どもが積極的に幼児期の経験や自分の思いなどを話してくれるようになり、幼児教育での学びと各教科等の学びがつながり、学習に深まりが見られるようになった。
- ・幼児教育の指導方法や先生の関わりについて学び、「教師が子どもに教える」から「子どものもっている力を生かす」へと指導観が変わり、「子どもの力を信じて待つ」「失敗を恐れず、挑戦させてみる」「できなかったときは一緒に考える」など小学校の教員の関わりが変わったことにより、子どもたちが主体的に探究的な学びに取り組んでいく姿が見られるようになった。
- ・小学校との交流が増え、卒園児の成長した姿を見る機会が増えたことで、幼児教育施設の保育者が保育の意義や重要性を感じる契機となり、幼児教育の基本を改めて大事にしようとする意識の醸成が図られた。5歳児の保育室に、子どもが自由に使えるよう様々な素材や用具などを置いたり、子ども一人一人がやりたい遊びを思いっきりできる空間や時間を工夫したりしたことで、子どもが自分で考えたり、友達と話し合ったり、力を合わせて作ったり、試行錯誤したり、新たな発見をしたりしながら遊びに没頭する姿が見られるようになった。
- ・本事業実施前は、他の幼児教育施設との交流はほとんどなかったが、幼保合同研修会を契機に互いの保育を参観し合ったり、合同保育を行ったりするようになり、他園の実践に学び、環境構成や援助を工夫するようになった。環境構成や先生の関わりを工夫したことで幼児の遊びが高まり、生き生きと遊ぶ子どもの姿に喜びを感じた保育者がさらに工夫を重ねていく好循環へとつながった。
- ・合同保育を行ったことにより、日常とは異なる子ども同士の関わりから遊びが発展していく様子が見られるとともに、交友の広がりにもつながり、小学校入学後、すぐに仲良く遊んだり学んだりする様子が見られスムーズが小学校生活のスタートにつながった。

<保護者の反応>

- ・保護者に本事業に関わるプリントを配付したり、小学校のWebページに架け橋期のカリキュラムとスタートカリキュラムを掲載したりすることにより、取組の周知を図った。保護者からは「子どものためになるのであればいい」との意見をもらっている。
- ・令和6年度は、幼児教育施設の参観日に、幼小接続アドバイザーが5歳児の保護者に本事業の取組内容を説明した。特に、第1子が小学校に入学する保護者は就学への不安が大きいことから、説明会を実施したことにより、小学校生活や幼小連携による接続の取組について知る機会となり、保護者の安心感につながった。

【佐呂間町】

<先生方の指導と子供の姿の変容>

- ・本事業実施以前は、幼児教育施設の保育者も小学校の教員も架け橋期の教育が子どもにとって大切であることについては理解しているが、年1回の視察や引継ぎに留まっている状況であり、互いの教育を生かした教育活動は十分に行われていなかった。
- ・架け橋期のカリキュラムを作成したことにより、活動によって育まれる資質・能力や、その資質・能力のつながり等が明らかになり、育みたい資質・能力の育成に向けてねらいや目標を明確にした保育・授業が行われるようになった。ねらいや目標が明確になったことで、子どもたちが意欲的に遊んだり学んだりするようになり、興味をもって対象に関わり、工夫したり試したりする姿が見られるようになった。
- ・子どもに自己選択させたり、考えさせたりする場面を多く設定するようになり、子どもたちが主体的に行動する姿が見られるようになった。
- ・架け橋期のカリキュラムがあることで、先生が自信をもって楽しく保育・授業を行う姿が見られるようになり、先生が創り出す保育・授業の楽しい雰囲気が子どもの楽しい遊びや学びにつながる様子が見られた。
- ・幼児と児童との交流活動を行うことで、保育者は児童理解、小学校教員は幼児理解を深め、交流活動後も保小のつながりを意識した活動を行う様子が見られた。

<保護者の反応>

- ・架け橋通信「さこつと」や「学びの地図」を配付し、接続に向けた取組を保護者に発信したことにより、「保育所から小学校へ切れ目なく連続して教育活動が行われていることに安心感がある。」「保育所と小学校との交流内容が分かり、連携して子どもを見てくれていることを嬉しく思った。」との意見があるなど、小学校就学に対する保護者の不安感の軽減につながった。
- ・5歳児と小学校1年生との交流活動を行ったことにより、「小学生との交流があった日がとても楽しかったようで嬉しそうにその日の出来事を話してくれた。入学前に小学生との関わりがあるのは親にとっても安心した。」「子どもが小学校へ行き、1年生と活動できたのがとても楽しかったようだ。小学校を全く知らないで入学するより安心感があると思う。」との意見があるなど、保護者は我が子が小学校入学への安心感をもち、期待感を高めている姿を見ることで本事業の意義を感じている様子が伺えた。
- ・幼保小の架け橋プログラムについて保護者へ発信したことにより、「架け橋通信「さこつと」や架け橋期のカリキュラムが、家庭でのルールや習慣、生活リズムを整えることなどを考えるきっかけになっている。」との意見があるなど、家庭における架け橋期の生活や学びの基盤づくりへの意識啓発を図ることができた。

「自分で考え、選んだほうが、素直に成長する」～さろまっ子カリキュラムミニ解説～

「問う」「考えさせる」
「子どもの意をよく聞いてあげる」

「何をして遊ぶ?」「こっちの服とあっちの服、どっちがいい?」
子育てという、長く、大きなプロセスのなかでは、子どもに上手に葛藤させ、考えさせることが大切です。(中略) 子どもは自分で考え、迷ったすえに自分で選んだほうが、必ず人間として深く成長します。

子どもの生きる力を伸ばす上で、とても大切なものの一つに「自己決定力」があります。今回は教育テレビの子育てコメンテーターとしても活躍されている汐見稔幸(しおみとしゆき)先生のご著書「この「言葉がけ」が子どもを伸ばす!」(PHP文庫)からご紹介しました。

【架け橋通信「さこつと」vol. 6から一部抜粋】

7. 今後の課題と展望

■ ステップ0～2の市町村に対する接続期の教育の重要性の理解啓発

令和6年5月1日現在、ステップ0～2の市町村の割合は約4割であり、中には幼児と児童との交流を行っていることをもって幼保小の接続が十分に行われているという認識が未だにあったり、公立幼稚園がないという理由から市町村教委の当事者意識が低かったりする状況がある。また、これまでも幼保小の接続を推進してきた地域においては、すでに幼保小の架け橋プログラムの取組が進められており、市町村間の取組の格差がより一層広がってきている。

また、私立の幼児教育施設や大規模市町村の幼児教育施設・小学校からは、幼保小の架け橋プログラムを推進していく上では、自治体の関わりが重要と考えるが要請しても取組に消極的であるといった声も多く聞かれることから、全ての子どもに格差なく質の高い教育を提供することができるよう、義務教育課小学校担当係と連携し、教育長会議や教育委員会訪問等において、北海道版幼児教育スタートプログラムを基に、幼保小の接続の正しい理解やその重要性、自治体の役割等について周知を図っていく。

■ 小学校への幼保小の架け橋プログラムの理解啓発

これまでも幼児教育施設と小学校の幼保小の接続の取組に対する温度感の違いが課題となっており、小学校管理職を対象とした研修を実施するなどして、接続期の教育の重要性について理解啓発を図ってきたが、令和5年度実績で架け橋期のカリキュラムを作成している小学校の割合は約4割弱となっており、スタートカリキュラムについても、幼児教育施設の意見は踏まえているものの小学校のみで作成している割合は約8割となっている。また、幼児教育施設から小学校へ連携を依頼しても断られるといった声も少なからずある状況となっている。

本事業を実施したことにより、指定地域においては、小学校における登校渋りの減少や円滑な学校生活のスタート、主体的・対話的で深い学びを実現する子どもの姿が多く見られるなど小学校側のメリットが大きいため、各種研修等において北海道版幼児教育スタートプログラムに掲載した事例を紹介するなどして、幼保小の架け橋プログラムの効果を発信していく。

また、本道の小学校1年生の不登校児童数は、この6年間で約6倍と喫緊の課題となっていることから、生徒指導担当課と連携し、不登校の未然防止の観点からも接続期の教育の重要性を働きかけていく必要がある。

■ 指定地域の調査研究成果の全道への発信

幼児教育施設を中心に、「幼保小の架け橋プログラムに着手したいが具体的な取組や進め方が分からない。」「接続のイメージがつかめない。」といった声が聞かれることから、指定地域の調査研究成果等を取りまとめた北海道版幼児教育スタートプログラムを活用し、各種研修等で進め方の手順や方法等を発信していく。

また、指定地域の北海道版幼児教育スタートプログラム事業成果報告会の資料を幼児教育センターのホームページに掲載するとともに、各地域の実践事例を収集し発信するなどの取組を進めていく。

ただし、本道には多くの幼児教育施設・小学校があり、当センター主催の研修に参加する幼児教育施設・小学校には偏りがあることから、幼児教育施設の保育者や小学校教員が都合のよい時間に学ぶことができるよう、オンデマンド教材を配信するなど、研修の在り方も工夫していく必要がある。

8. まとめ

【幼保小の接続に必要なこと】

■ 幼児教育施設の保育者と小学校教員が互いに尊重し合う関係性

- ・ 幼児教育施設の保育者から「架け橋プログラムの取組を通して、初めて幼児教育施設側からも意見を言ってくれたことが分かった。」との声が多くあり、幼保小の接続とは幼児教育施設が小学校からの要望に応えることといった認識がまだ根強くある。
- ・ 幼保小の接続に向けては、互いの教育を理解し、互いの教育に学びながら、子どもたちにとってよりよい遊びや学び、先生の関わりなどについて、忌憚なく意見を交わすことができる関係性の構築が重要であると考えます。

■ 管理職によるマネジメント

- ・ 指定地域では、0歳から18歳の学びの連続性の確保の視点から、5歳児と小学校1年生の担任以外の先生も合同研修会に参加できる体制や校内の先生も取組に参画できる体制を整備したことで、先生方の接続に向けた取組への関心・意欲の高まりが見られた。そして、自身の保育や授業について振り返るきっかけにもなった。
- ・ 教育の現場は多様な業務があり、多忙な日々であることから、現在の業務に加えて接続の取組を行うことは難しいとの声が多い。指定地域で行ったように、管理職が中心となって、校務分掌の整理、業務の精選、勤務時間の工夫等を行い、先生方が研修に参加したり、接続に向けた取組を行ったりすることができるようにマネジメントしていくことが必要であると考えます。

■ 短・中・長期目標の設定

- ・ 指定地域の幼児教育施設・小学校においては、接続に向けて新たなことを一から始めるといよりは、現在の教育課程・全体的な計画において接続に向けて取り組めることは何かという視点で取組を推進した。
- ・ 幼保小の接続の取組を実効性・継続性のあるものにするためには、「遊びや学習に子どもの意見を取り入れてみる」「先生の関わりや声かけを変えてみる」など、今すぐできること、じっくりと取り組む必要があることなど、短・中・長期的に取り組むことを整理しながら、接続の取組へのハードルを下げるためにも、できることから少しずつ始め、決して無理をせず、地道に進めていくことが必要であると考えます。

■ 互いの教育に学び、自園・自校の保育・授業改善

- ・ 指定地域においては、幼児教育施設同士、幼児教育施設と小学校が互いの教育のよさに学ぶことで、自園・自校の保育・授業の改善が図られ、主体的・対話的で深い学びの実現が子どもの育ちにつながった。
- ・ 各幼児教育施設、小学校には、それぞれ特有の文化や保育・授業の進め方などがある。横と縦のつながりを構築し、互いの保育・授業に学ぶことで新たな気づき生まれ、指導観の変容や指導方法の変容へとつながっていく。
- ・ 教師の指導の変容により子どもの姿が変容することを実感した先生方は、幼保小の接続の取組の重要性を実感し、そのことが更なる取組の推進へとつながっていく好循環が生まれると考えます。

【国や自治体が果たす役割】

- ・国におかれては、地域や施設種類の違いなどによる幼児教育の質の格差、小学校の接続の取組への意識醸成の必要性などの課題がありますことから、引き続き、文部科学省とこども家庭庁との連携、幼児教育課と小学校担当課が連携の上、自治体が行う幼保小の架け橋プログラム取組への支援をお願いいたします。
- ・本道においては、市町村、幼児教育施設、小学校等に対し、幼児期及び接続期の教育の重要性や幼保小の架け橋プログラムについて引き続き啓発を図り、各地域において取組を始められるよう、北海道版幼児教育スタートプログラムを活用しながら取組の手順や方法等を周知していく必要がある。
- ・さらに、市町村、幼児教育施設、小学校等の接続の取組への意欲を高めるためには、他課と連携し「小学校1年生の不登校」「学力」「体力」などの本道の課題について、接続の視点から考える機会を設定することも考えられる。
- ・各市町村においては、幼児教育施設の設置者や施設類型が多様であり、他園・小学校とのつながりが少ない園も多いことから、教育委員会が中心となり、福祉担当部局とも連携を図りながら、幼児教育施設と小学校の先生が顔を合わせて、子どもの育ちについて話し合うことができる場や機会を提供するなど、地域の幼児教育施設と小学校をつなぐコーディネーターの役割が重要であると考えます。